

---

# kimi (サグラダファミリア版)

LEIN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

k\_i\_m\_i（サグラダファミリア版）

### 【著者名】

LENZ

### 【あらすじ】

私の完結した「k\_i\_m\_i」の焼き直している工場です。工場は、年齢、ストーリーが変わります。サグラダファミリアのように（笑）、形を変えます。

「あ、あの子」ないだの子じゃない？」

「うん…。」背の高い方が、ふりくらと小柄なもう一人に問いかける。

○レ風の二人連れが、信号待ちで止まっているバイクを見つめていた。

茶色の、顎紐で結ぶタイプの可愛いヘルメットをしている。

「女の子だよね？」

「男の子じゃない？」

「いや…胸は微妙にあるような気がするよ。」

「ちょっと可愛くない?」背の高い方が、小さい方に更に聞いかけ る。

「なんだか”ジャニ”みたいな感じだよね」興味深々な顔で背の高い女は続けた。

小さくてぽっちゃりした方は、黙ったまま上目づかいでジッとバイクの主を見つめていた。

「やだ！利奈！ヤバインんじゃないの？」

いたずらっぽく、美人な方が肩を叩く。

「うひら、今、ちょっとレズっぽくない？」

屈託なく、背の高い女は笑って肩を叩いた。

ぱっちりつは、急いで手を反らし、「そんなの気持ちわるいってーのー」と高笑いしてみせた。

聞こえているのか、いないのか、バイクの主は、信号が変わると、ギアを入れ、颯爽と行ってしまった。

ぱちりした女は、言葉といはばらは、じつと、バイクの後姿をいつまでも追っていた。

馨は、マンションの自転車置き場にバイクを置くと、メットを外した。

フルフェイスのメットにしつかわよかつたー！と馨は思つ。

いちいちウザイんだよ。いつの世界に来る度胸もない癖に。

フルウェイスのメットと、スーツに包まれているこの瞬間だけは、誰の目も気にせずに自由でいられる。

玄関のドアを開けると、馨はスーツを着替える時間ももどかしそうに、パソコンの置いてある、大きな机の椅子に座った。

そして、端正な顔の中の、漆黒の大きな瞳を左右にぐるぐる動かしながら、机の上のデスクトップパソコンをついた。

指は、もう自動的に電源スイッチを押す。

スイッチの黄色の光が、横に長四角を作っている。

その光が穏やかな黄緑色に変わり、ギギギと音を立ててパソコンが動き始める。

馨は木の椅子に腰掛けながら、作ってきたばかりのココアで両手を暖めた。

検索ウインドウに、「women's 100ms」と素早く入れると、いつもの薄紫色のサイトがある。

画面を見るだけで、馨はほっとしたような表情を浮かべた。

このサイトには、一人きりで話せる小部屋が1～ある。

普通ではない僕達が、日常では困難を極める「出会い」を求めて、皆がここに集まる。

常人にはわからっこない、滑稽な程の心の奥からの渴望。

それに突き動かされ、姿の見えない相手との濃密な時間を過ごす場所。

急いで帰ってきたのに、1～ある、「密会の部屋」は全て満室になつてしまっていた。

馨の端正な横顔から、落胆の色が見えた。

”彼”は溜息をついて、天井を見上げる。ここでの濃密な話しあは長引くからだ。

部屋の主は、何人かと話して満足するか眠くなるまで、去る事はない。

一つ部屋が空くまでに、まだまだかかるだらう。

そうタカを括りながらココアを飲み、何気なくエンターキーを押すと、早くも1-1番ROOMが空室になつていて。

馨は慌ててココアを置き、急いで入室をクリックした。

そして素早く指を滑らし、すいすいと部屋のトップlickを書きはじめた。

-近くに住んでいる方、お話ししましょっ

これが馨のいつも常套句だった。

エンターキーを押すまでは、部屋が取れたかどうかはわからない。今も何人かが空き部屋めがけて飛び込んでいるはずだ。

間に合つかーとHンターキーを押すと、部屋が出来ていた。なんと  
か一番乗りを確保できたらしい。

後は、今夜のネコを待つだけだ。

一仕事を終えたように、馨は椅子の背もたれに寄りかかった。

今日はツイているらしく。5分もしない内に、「ゆかさんが入室しました」と、画面に浮かび上がった。

ツーショット部屋は一人の為に自動的にロックされた。

「こんばんは」と馨から入力する。

今日の初めてのお姉さんばかりんな女だろう。

「こんばんは」と、「ゆか」の返事が書き込まれる。

「オハツだね」

「たぶん、オハツ、かな」

皆、EZをよくチエンジする。  
ハンドルネーム

初対面のつもりが、実は以前に話した相手だったりするのだ。

この子に会つた事はあつたつけ?

でもこのテンションの高さだと、きっと高校生あたりだらうな。

「馨 失礼だけど、年齢聞いてもいい？」

「ゆか 14だよ」

「うわ、14つやほんとに若いなーと、馨は苦笑した。

「ゆか 馨は？」  
かおる。

「馨 僕は17になつたばかり。」

一瞬、ゆか 返答が止まつてしまつた。

「ゆか 僕つて…男？」

「馨 いや、いちおう女だよ（笑）」

「ゆか もしかして、バリタチさん？」

「馨 バリタチ…。まあそんなとこかな。」

「ふうん、と、「ゆか」はつまらなそつた返事をした。

馨は少し申し訳ない気持ちになつた。

「馨 最近、フュニタチの方が人気あるからなあ（苦笑）」

「ゆか　つていうか聞いてよー彼女と最近つまくこつてないの」

14の癖に「彼女」がいるなんて生意氣な！

しかもバリタチが苦手な割には、ずいぶん、どつかと屈座っている。

なんでも、「ゆか」の彼女は15歳。

最近、メールの返信がなかなか来ないらしい。

「ゆか　ああ、散々愚痴つたら、スッキリした！」

ゆかの文字が心なしか輝いて見えた。

「馨　あいおい、僕は愚痴られ損かよ。」

馨は苦笑した。

「ゆか　ゴメンー！　でも、ただ、じつと聞いてくれただけで嬉しかったんだ！」

普通は雑談目当ての相手を落としてしまつみたいだ。けれども、馨は落とす事ができない。

「ゆか 馨ちゃん、またお話し聞こしてくれる?」

「馨 もちろん!」

「ゆか ありがと」

少々疲れながらも、「ゆか」「が心の落ち着きを取り戻してくれて嬉しい。」

「ゆか じゃあでもゆかから質問なんだけれど」

「馨 うん?」

「ゆか 馨けんはこいついつもここにいるみたいだけれど...」

「馨 うん?」

「ゆか 彼女を作る気はないの?」

「馨は困りてしまつ。」

「馨 彼女を作りたいからくるんだよ。でもそれが簡単にはいかなく

てね。」

「ゆか 正直な人だね。あ、馨ちゃん、ゆかそりそろ落ちるね。」

ゆか は、これからお風呂に入るといつ。

「ゆか 変な想像しちゃダメよー。あ、馨もいい彼女見つけるんだ  
よ」

苦笑しながらも、

ディスプレイの前で、「ありがとう」と皿を細めて笑っていた。

「ゆか」が部屋から退出し、僕はまた、一人になってしまった。

・近くに住んでこる方、お話ししまじょー・

無論、こんな事は嘘。

「お話しする」、だけで済むよつた馨ではない。

もつ向人とこじりで話し、そしていくつの夜を越えた事だろう。

「お前はそっやつて、ヤル事だけ考えているから、口クな出会いに発展しないのや」

ビアンバーで、ONIが水割りのグラスを片手に、タバコを吹かしながら僕に言っていたのを思い出した。

「もつと”心”で結びつく事を考えなきゃな」

もつともうじい事を言いやがって。地に足がついたようなONIに  
馨は苛々した。

もちろん、僕だってそうしたいと願っているんだ！

だけれど、どうしてか上手くいかない。

どうして女共は僕から離れてしあうのだから？

なぜ？なぜ？なぜ？

「ゆか」が出て行ってから、なかなか次の「お客様」が来ない。

もう一時だ。そろそろ諦めて、今日は寝よう。

馨がサイトを開じ、マウスを動かすと、

「いじばんは」

この画面に一言だけ書き込まっているのがついた。

馨は慌てて姿勢を正した。

馨 「ごめんな。待った?」

k.i.m.i 「少しだけね。」

「k.i.m.i」? なんだ「k.i.m.i」なんだら? チャットでのHN<sup>ハンドルネーム</sup>

は自分でつけられるの?。

HNは親の世代が自分達につけた名前とは感覚とは別のものだ。普通はもうちょっとナルシスに溢れた名前をつけるものなの。

馨 「k.i.m.iさんって言つんだ?」

少し間を置いて返事が来た。

kimi 「変わっていると想つたでしょ」<sup>うつ</sup>。

馨 「いや、別に。」

本名が、「公子」とか「貴美子」なのだりつか?

それはおこでおこで、この女からは、返事がなかなか返つてこない。<sup>ひと</sup>

いたずらだりつか?

そう説つてみると、kimiからの返信が書き込まれた。

「kimi いつもよく来るのね」

「馨 うん。ほととじ毎日のように来てるかな?」

「kimi 私は、実は初めてなのよ。」

「馨 そつだと想つた」

馨は納得した。

「kimi もうしてわかるの」

馨はちよつとためらつた。

「馨 入力が、少しだけ遅いから

彼女を傷つけていないかと少し心配になる。

「kimi 「めんなさい」

やつぱり言わなければよかつたかな、と思いつつ、

「馨 いいんだよ。ここに初めてきた人は、大抵そうなんだ。」

と少しひフォローしてみた。

「kimi そういうえば、さつきの部屋では速すぎて話についていけなかつたの」

初めてとこうじの女に少し興味が湧いてくる。

僕達には、慣れっこ、少しケバケバしい紫と黒と黄色のチカチカ派手な場所。

初めての人には、一昔前のキャバレーみたいな、このサイトがどう映るのだろう。

それに、ビアンサイトに入る時は、誰でもドキドキするものだ。

「馨 どうへーここに入ってきて」

kimiは驚きを隠せない様子だった。

「kimi まるで別世界がいきなり目の前に広がったみたいだわ

…。「

馨も、ここを始めて「アンジュ」に教えてもらつた時は、不思議の扉、妖しい世界の扉を開いてしまつたような気がしたものだ。

「k.i.m.i おまけに専門用語が沢山出てきて、わからぬ事だけよ」

「馨 例えばどんな?」

「k.i.m.i タチ、ネコ、トランス、フューリーFTM?」

僕らには当たり前になつてゐる言葉達。

ビアンチャットを始めた頃には、僕も「タチ」だの「ネコ」だのがわからなくて困惑した覚えがある。

「馨 あのね、”タチ”はビアンの攻め側で、”ネコ”はビアンの受け側」

「k.i.m.i つまり…、タチは男っぽい人で、ネコは普通に女らしい人?」

「馨 というか、僕らみたいに、男っぽい”タチ”もいれば、どうからどうみても女らしい”タチ”もいる」

じゃあ…と彼女がためらいがちに尋ねる。

「*kiri* 馨さんは、かなり男らしい？」

「馨 いや…。」

「バリタチ」というと、何か「バリバリの男ファッショソで決めた、カツコイイ人。もしくはイカツイ人」というイメージが僕にはある。

「馨 僕の事は、”ボーアッシュなタチ”とでも思ってくれると一度いいとおもひ。」

ビアンの集まるクラブで、頭を撫でられながら、「可愛い」とドラッグクイーンからおでこにキスされてしまつ僕は、言つてみれば「ボーアッシュなタチ」というところなのだろう。

「*kiri* ボーアッシュなタチさん”ね。わかつたわ。」「で、馨さんは、ここで彼女を探しているのかしら？」「

「馨 そうだよ」

答えると、それならお邪魔じゃないかしら…とこの女は訊ねてきた。

やはり、特に相手を探しているという訳ではなく、インターネットをしている間に、迷い込んでしまったのだ。

時計を見た。もう一時か。待っていても誰もこない事もある。

それと、何も知識がない彼女が、他の部屋に行つても、落とされてしまつのは可哀想だ。

今日はこの「kimi」がラストのお客さんで、そろそろ部屋を畳む事にしようと決めた。

「馨 一応そうなんだけれども、別にいいよ。なんでも聞いてよ。」

「kimi 優しいのね。貴方は。」

優しいじやなくて、単にお人好しなのだ。

「口説き」ではなく、普通のトークをするのも、新鮮な気がした。

一通り、用語について説明すると、この人は満足したようだった。

「私がチャット、不慣れだったので疲れたでしょ？」

「そんな事ないよ…」

子供ではない、落ち着いた雰囲気の彼女に、僕は好印象を持つ。

「馨  
ねえ」

「kimi ねえ

僕らは同時に同じ言葉を入れてしまった。

「馨 kimi さかうじ

「kimi 今日はとっても楽しかった。優しくしてくれてありが  
とう」

「馨 僕もなんだか不思議と楽しかったよ。こういうのも新鮮だね  
わーチャットって面白いのねー」

この女が、少しワクワクしているみたいに僕には見える。

「馨 そうさ。僕なんか、もう完全な中毒だよ

「kimi よかつたら、明日もお話できないかしら? きっと  
いろいろお話を聞かせてほしいわ

「そつーその言葉をなぜか僕も言いたかったんだ。

「馨 じゃあ、部屋を作つて待つてるよ。明日の10時でOK?」

「kimi 了解。じゃあ、また明日会いましょうね。おつとよ。」

もうすぐ5時。バイクを止めて、本社ビルに戻る。

「ここは居心地のいい職場だ。

「よう！兄ちゃん」隣のデスクから人懐っこい声がする。

「よー・岡本君」

「なんだ、そそくさと仕事終わるのかあ？」眼鏡の奥の目がいたずらっぽく笑っている。

「爺さんに構つてゐる暇はないよ」

「なんだい、姉ちゃん。男とデートか？」

「んなもん、いないつてば」

「ちょっと待ちなよ。一杯やつて帰ろう。」

「駄目。今日はバイクだからさ。」

最後の書き物を終えると、僕はとっとと荷物を持ち、走るようにロッカールームへ行つた。

自前のバイクに跨り、まだ日の高い街の中を駆け抜けていく。

風が地肌の間をすり抜けていく。なんて心地いいんだろ？！

マンションまでひと走りして、エレベーターを昇る。ドアを開けると、僕の城が広がっている。

畳にすれば8畳もないあたりの部屋と4畳ほどのキッチン。

落ち着いたベージュでカーペットから、カーテンまで統一している、お気に入りのスペースだ。

「一人暮らしは寂しくない？」と聞かれるけれど、特にそう思った事はない。

なぜなら僕はそう、パパとママに守られないとわかっているからだ。

実は、そのパパさんと、ママさんは、一昨年からNZに住んでいる。

小さい頃に、東京から九州へ転校したママは

「日本国内でも大変なギャップに苦労をするのに、この子を外国になど行かせたくない……」と泣いてパパに猛反対してみせた。

父さんは、「一ヒーひとつ、母さんがいないと作れない。

まるで一昔前の父親のような人だ。

仕事場では、「鬼」と呼ばれているような人。

それなのに、そんな父さんが、実は母さんがいなくては一日でも耐えられないという事も僕にはわかつている。

僕を「自分の傍においておきたい」、と必死に説得するパパ。

「子供をおもちゃみたいに、好き勝手に動かさないで！私はここに馨と残るから！」と、めずらしく頑固になつているママ。

その日も一人は言い争つていた。

もう、一円も話し合つていて、埒<sup>らし</sup>があきはしない。

それぞれに想いがあるのはわかっているのだけれど、僕は一人の口論に耐えられなくなつてくる。

苛々（いらいら）が頂点に達しそうになつたその時、僕の頭の中に、ある光景が浮かんできた。

パパが一人でぽつねんと淋しそうに座つている。ママが実家に用があつて家を空けた3日目の事だった。

「馨」

「うん？」

「…なんだか我が家から太陽が消えてしまったみたいだ」

僕だつて、パパとなんだかんだお話しているのにそれはないだろ、とあの時は呆れたものだ。

パパときたら、母さんがいないだけで「毎日が夜中」になってしまふのだろうか。

ハツと我に返つた僕は、「馨に提案があるんだ」言い争つ一人に必死で割つて入つた。

そして、2週間かけて口説きに口説いた末、セキュリティ会社2社と契約する事、ママの姉の家が隣にあるマンションに住む事を条件に、僕は一人ここへ残つた。

もうあれから2年程になる。

僕は頭を切り替え、机の椅子を引いた。そろそろあの人を待つ部屋を作らないと。

PCでいつものあのサイトを探す。

どうにか9時30分には部屋が開くと、『ペーペーストしていた文  
字を貼り付ける。

・k.i.m.uさん、来てください・

心の中がざわざわとしているのに気づく。

どうして僕はわくわくしているのだろう?と鬱はハツとする。

どうや、『違つ世界を覗いて興味深々』チックな人だ。

別に僕じゃなくても、気のいい、親切なピアンがいれば、その人に  
いろいろ聞けばいい話だ。

いや、もう既に聞いているかもしれない。

10時じゃなくて、もひとつ早く部屋を開いておけばよかつた、と後  
悔する。

銀色の四角いフレームの針時計を見上げると、時間は9時58分になっていた。

時計の秒針が10時を指す。

僕はもう一度エンターキーを押す。

と、kimiさんが入室しました。というピックが画面に踊った。

「kimi こんばんは！」

「馨 こんばんは！？」

来てくれたのだ、kimiさんは。

特別これから口説ける相手でもないのだけれど、何かワクワクするものを感じる。

きっと彼女が「大人の女性」だからだ。

僕は大人の女性のチャットでの、落ち着いた、それでいて人生の深みを知っている口調が大好きだった。

「kimi お待たせしちゃったかしら？」

「馨 いや、ワクワクしながら待つていたからいいんだよ」

「kimi 30分も待つっていたのね」

チャットの部屋の外からは、誰が、どんなメッセージで待機しているのかがわかるようになっているのだ。

「馨 見てたの！？」

「kimi 早かったのね」

「馨 だったら声を掛けてくれれば良かったのに。意地悪だなあ（笑）」

「kimi 見ていて面白かったわ。また会えて良かったわね」

「馨はちよつと拗ねた。」

「馨 ネットナンパ放つたらかして待つてたのに。」

「kimi あら、馨くんは恋人を探しているんじゃないなかつた？」

「いつの間にか、僕は「馨さん」から「馨くん」になつている。」

急に子供に落とされたような、ガツカリするような、でも、確実に距離がちぢんだような嬉しさを感じる。

「馨 まあ、そりなんだけど、僕はもてないからね。」

「kimi そんな風には思えなかつたわ。チャットではリードしてくれるし、いろいろと案内もしてくれたし…。」

「馨 僕の場合はやり方が無茶苦茶なんだよ（苦笑）」

「kimi 無茶苦茶ってどんな？」

「馨 うーん。」

「kimi まあ、いいわ。馨クンってどんな子なのかしら？」

「馨 そんなの一口では言えないよ」

「kimi 芸能人では誰に似てる？」

「馨 言われた事もあるけれど、自分じゃ似てないと思つ。しいて言えばインド人？」

「kimi えつ？」

「馨 夏にカンカンに日に焼くとするでしょう？ そしたら、僕はインド人か、ポリネシア人にでも間違えられるんだ（笑）！」

kimiは赤い万年筆をぴたりと頬に当てた。

「馨 kimiさんは芸能人に例えると？」

「kimi 誰にも似てないわよ」

「馨 じゃあ身長は何センチ？」

「kimi 164」

僕と同じだ、と馨の文字が嬉しそうに弾んでいた。

「kimi 私も同じなのね。じゃあ体重は？」

「馨 61キロ。kimiさんば？」

「kimi そんな事、女人に聞くものじゃないわよ（笑）」

馨は眉毛を下げる、困った顔をしている。

「馨 だって、知りたいんだもん。じゃあ、瘦せてるか、ぽっちゃりさんかだけでも教えてくれないかな」

「kimi 瘦せてると言いたいだけれどね。出でる所は出てるわね」

「馨 じゃあ、”グラマー”なんだね！」

「kimi そうよ。」

「kimi 何か余計な期待をさせちゃつたかしぃ？」

「馨 したした！」

「kimi グラマーな女おんなが好き？」

「馨 もちりん！」

「kiriiri なぜ？」

「馨 ……だって、母性を感じるじゃないか。」

「kiriiri 馨クンは単にデブ専なんじゃない？」

馨は少し困惑する。

「馨 デブ専って事はないijo。だってさ…、柔らかい方がいい  
でしょ？」

「kiriiri おっぱいが？」

馨はひやっと椅子から落っこちてしまった。

「馨 ……おっぱいは特にだよ。正直、柔らかい胸の間に顔を埋めな  
がら僕は死にたいと思つ」

「kiriiri 胸フュチなのね」

「馨 そうかもしねない。」

柔らかな胸を吸いながら、挟まれながら、永遠に甘えつけられ  
ば、僕は何も後悔する事はないだろつ。

「kiriiri 何か想像してるのでしょ？」

「馨 ちょっとだけ、ね。」

なんて正直に、こんなテーマで会話する子なのだから、この子はと  
kimiはあきれる。

「kimi いつもこんな事をチャットで話してくるのかじい?」

馨はうーんと、天を仰ぎながら、今まで100で何百人と話した会話を思い出していた。

「馨 確かにちょっとEな話が多いかもしないな。。。」

「kimi チャットでEを迫るとかもする?」

「馨 そんな事しないよ。あんなバーチャルHつまんないもの」

「kimi バーチャルHって?」

しまった。墓穴を掘ったかもしれない。この女は入りたてで、チャットで、”あの事”が行われている事すらも知らないのだ。<sup>ひと</sup>

「馨 つまりその…。」

「kimi つまりどんな?」

「馨 チャットしながら、画面の向こうで、アレをなぞっている状態とでも言えばいいのか…。」

「kimi つまりは、テレフォンセックスならぬ、チャットセック

クスつて事?「

馨はちよつと困ったよつて頭を搔いた。

「馨 まあ、やうこいつ」と

「k.i.m.o 馨クンが毎口来てるのよ、それを楽しむためなのかしら?」

「馨 まさかー。」

いかにチャットエが面白くないかを、じつ説明しようとかと必死になる。

「馨 あんなのわ、あつだの、「あああああああ~」だの……」

「k.i.m.o うん?」

「馨 よく、そんな言葉、恥ずかしげもなく打てるなあと……」

「k.i.m.o そつかじり?」

「馨 だつて不可能じやない?いたしながら打つんだよ。「イクー」とか(爆)ー!」

「k.i.m.o キーボードが濡れちゃうわね。」

「馨…………。」

「馨…………。」

「馨

「馨…………。」

「馨

「馨…………。」

「kimi 大袈裟ね（笑）」

「馨 なんて事を！（笑）」

「kimi ふふ。」

「馨 Hそのものは大好きだけれど、なんでチャットHをしたいのかがまったく僕にはわからないよ」

必死に馨は抗弁する。

「kimi それはね…女も、淋しい夜もあるの。」

「馨 そんなものなの？」

「kimi ええ。許してあげなさい。」

馨は困惑した。

「馨 見えない、触れない画面の向こうの相手に、興奮できる気持ちがわからないのよ

「kimi 興奮しないの？」

馨の心臓が早鐘を打った。

「馨 しないってば……！」

「馨 だって、やるだけやつたら、「あーすつき」ってな感じでおやすみなさいだよ。」

そうだ。チャットHに来る女性は、ただ、マスターべーションがしたいだけなのだ。

話をHな方向に強引にもつっていく、「想像してみて」となる。そして、それに応対していくべきか、止めいか返答が切れる。

「馨 気持ちよくなつたら、落ちていいくのがチャットHだよ。」

勝手なもので、と馨は笑つた。

「kimi 面白うだわね。チャットH。」

「馨 やりたいの？」

「kimi 冗談よ。」

馨は慌てた。

「馨 あれは面白くないよー。」ひちはうんザリしながら、「乳首吸つていい?」とかやつてるの。早く終わってくれないかなー、とか思いながら(笑)」

「kimi ふーん」

「kimi ねえ…」

「馨 うん?」

「kimi 馨は自分でしないの?」

「馨 自分でつて?」

「kimi 一人Hよ」

「馨 な、なんといつ質問を。。。」

「kimi (笑)。で、どうなの?」

「馨 いや…」

「馨 やり方わかんないもの。」

この子は、マスターべーシヨンのやり方も知らずに女を口説いているのか、とkimiは笑ってしまった。ちょっとからかってみたい、意地悪な気持ちがもたげてきた。

「kimi ねえ…」

「kimi 君は女の子相手に寝た事ある?」

「馨 …」

「馨 あるよ。」

自分を頂点に導けないのにどうせいつて相手の女を絶頂に導くのかしら?

「kimi H-Hって言つけれど、ビアンの人はどうしているの?」

「馨 指だね」

「kimi 指だけで絶頂に導くの?」

「馨 もちろん。だつて僕たち、ついてないもの」

まづい質問をしてしまつたかしら、と思ひながらも、興味を抑える事ができない。

「kimi 自分でできないのに、相手にはできるのね?」

「馨 うん。最初の人に、丁寧に教えてもらつたから。」

教えてもらえなければ、今でも僕は、経験がないまま、どうじょつと頭を悩ませていたかもしないと、馨は真面目に語つている。

「kimi 自分は絶頂に行つた事がないのに、相手が達した事がわかるのかしり」

失礼だな、と馨は少しむつとある。

「馨 数打ちや、嫌でもわかるよ」

「kimi 相手の女はちゃんとときてくれる？」

「馨 うん。時間も待ち合わせ場所もちゃんと約束してるので」

「kimi 断られた事は？」

「馨 そりゃあるわ。2回あるよ。」

「2回? ほんとに2回だけ?」

kimiは信じられず、「馨が傍にいるのならば、大声で訊ねてみたかった。

「馨 なんとそのうちの一回は3時間も待っていたんだ!」

「kimi すごいわね。諦めてかえりなさいつたら」

「馨 ……だって、淋しいじやん?」

「kimi うん?」

「馨 僕はものす」くワクワクして出掛けんのだよ。どんな人かな?  
?僕の事、気にいつてくれるかな?今度は彼女になつてくれそ  
なつて…。」

「馨 来てくれなかつた時は、眞面目にベンチで泣いてた

「kими 抱けなかつたから泣くの?」

「馨 たぶん、淋しくて淋しくて、見捨てられた子供と同じような  
気持ち」

「kimi 女一人来なかつたぐらいで。次にまた会う子を探せば  
いいんだからいいじゃない」

馨は、この女もやつぱり僕の淋しさをわかってはくれないんだ、と  
ガツカリする。

「kimi もう一つの断られたお話を聞かせてくれない?」

「馨 いいよ。」

「馨 JRの駅で待ち合わせて、先についていたんだよね。」

「kimi うんうん。」

「馨 メールしたら、「こちに向かっている」とて。で、その後、  
「着いた」という電話があつたから、安心して、飲み物買って飲  
んでいたんだけれど…。」

「馨 それからメールしても一向に来ないんだ。高架下でずっと待つてた。4時間待ったかな。あれは虚しかった（爆）！」

パソコンをする時と、本を読む時だけかける眼鏡をずらしながら、  
kimiは考えていた。

「kimi ねえ…、その時、何を飲んでいたの？」

「馨 リポビタンDだよ。」

kimi オヤジ臭いわね。

馨 僕はよく飲むよ。リポビタンDとか、デカビタとか…

kimi オロナミンとか…

馨 うんうん。栄養価もあるし。

kimi 飲みながら待ってるのね

馨 喉渴くしね。何にも入っていないものより、同じ飲むなら、身体にいいものがいいよ。

kimi 。

馨 何？

馨 何だよ？

kimi ほんとにつて馬鹿ね！

馨 は？

kimi そりゃ引ぐに決まってるわ。

馨が目の前にいたら、頬を思いつきり、つねつてやりたい気分だ。

kimi 馨クン、いいこと？ 女の子はムードが大切な。いつ  
もはそれでもいいけれど、これ

から夜を過ごす事になる相手が、いきなり高架下でリポビタンD飲  
んでいたらガツカリするでしょう。

馨 そうかな？

kimi そうなの！…まったく何をやつてるんだか。

馨 うーん？

kimi …。

kimi じめんね、笑いが止まらなくなっちゃったわ。

kimi はPCの前でお腹を抱えていた。

馨 ギヤー――――――――――――――――――――――――

びひやつたら、このとんでもわかってくれるのだね。

kimi お願いだから、そういう時には、コーヒーでも飲んでいて。っここのミルクじゃダメよ。

馨 コーヒーではあれが一番好きなのに。

kimi ダメよ。美味しいなくともいいから、ショート缶のコーヒーにしなさい。

馨 紅茶花伝は？

kimi だめ。想像すると笑っちゃうもの。ドキドキして会いに行つたら、相手が紅茶花伝の大きい缶飲んでると思ったら…。

馨 いっぱい飲めてお得じゃない？

kimi いいこと？あなたはいいかもしないけれど、相手は貴方にこれから身を預けるのよ？

馨 わかった。これからは考えるかも。

kimi かもじやないの。約束しなさいよ。

馨 約束はできないぢや

kimi 意外と頑固ね。

馨 だつて守れそうにないもん。

kimi バカ…。

馨 あつ…。

馨 嫌われちゃったかな?

kimi だから”彼女”ができないのよ。

馨 そうか…

kimi シヨボンとしなくていいから

馨 うん…。

kimi まあいいわ。

「kimi」は結構、突っ込んでくる人みたいだ。何が「まあいいわ」何だろう?そんなに「リポビタンD」が気に障ったんだろうか。

「馨 僕はいつだって本気なんだよ。本気で会いに行くんだ。最初

から身体を求めるけれど、それは寝ないと安心できないからなんだ。

「

馨はいかに自分が真剣にそう思っているのか伝えたかった。

「馨 そこから始めて繋げようとしているのに、どうして受け止めてもうえないんだろ?」

みんなみんな逃げてゆく。身体を預けただけで。

抱いたら自分のものになる。抱かないと女の子は逃げてしまつ。

僕には抱かないまま口説ける自信も、友達からはじめる余裕もなかつた。

一種の病気みたいなものなんだろう。

わかつてはいても、この狂おしい思いを、自分でも止める事ができない。

まず抱かないと安心できない。すべての話はそれから。

待つてなんていられない。

まずは自分の腕の中でモノにしてしまつて、安心しきりたい。

他人から見れば狂っているんだろう。

誰にも僕の気持ちなんてわかりっこない。

どの女もわかつてくれなかつた。

いつかわかつてくれて、僕の丸<sup>ひと</sup>と全部を、全身で受け止めてくれる女神のような人が現れるといつ夢にすがつて生きている。

だから今夜も口説くんだ。

いくら説明してもわかつてもられない虚しだ。

この女<sup>ひと</sup>だって、わかつたふり、賢いふりをしているけれど、所詮女だ。

僕の気もしらないくせに。

泣きたいような、ひとりぼっちで世界から取り残されてしまつたような虚無感に脱力してしまつ。

馨  そうだよ、所詮、こんな僕を受け止めてくれる人なんていないのかもしない。

急にkimiに対し、冷たい気持ちが起つてくるのを抑える事ができなかつた。

kimi 聖クン

聖 うん?

kimi 明日は私が部屋を作つておへからきなれ。

聖 えつ?

kimi 仕方がないからモテナイ君の愚痴に付き合つてあげるわ。  
どうしたらいいか、一緒に考えましょ。ハ。

kimi : 時間は9時でいいかな?

僕の気持ちをわかってくれようとしている。暗闇からサーチと一筋  
の光が見えたような気がした。

聖 OKです!!

kimi じゃあ行くわね

聖 うん、ありがと。

kimi じゃあ、おやすみなさい、"モテナイ君"。

kimiは先に部屋を出ていった。

kimiは辛辣だけれど、博愛精神に溢れた人なのかもしれない。

これから一緒に考えよう。

kimiならば、わかってくれる。

きっと、僕の全てをわかってくれる。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

重厚な木製の扉を開けると、そこには夜空が窓いっぱいに広がっていた。

カウンターから、手を挙げている男がいる。

「いいだ、貴子」

田中貴子は、暖かく手を振る男を見つけると、ほっと力が抜けた様子で近寄っていった。

そして、手の持ち主の横にすべりこむ。

矢沢隆俊とは10年以上の付き合いだ。

「マテイーーを  
「かしこまりました」

この男に、高級な黒のステッジがよく似合ひ。こつもながらの端正な佇まい。女の注目を集めるために十分な魅力を持った男。

矢沢はじりじりをわざとらしく貴子を上から下まで眺めた。

「相も変わらずいい女だな  
「あら、お世辞でも嬉しいわ」

貴子はいたずらっぽく片手をつぶつてみせる。

「こんな夜中に会えるとはな。」

「なんだか近くにいそな気がしたのよ。」

「具合はどうだ?」

「大丈夫。もうしばらくで戻れると想つわ

「もう、復帰してこないのかとハラハラしてたんだぜ。」鬼コーチ  
がいないと、締りもなくなるからなと、矢沢はいたずらっぽくから  
かつた。

「皆は元気かしら?」

「ああ。何とか貴子の埋め合わせをやつしているよ。俺は”戦友”が復帰できそうなだけで嬉しいが。」

「”戦友”か。」

「ああ」

矢沢はウイスキーのロックを煽った。

「女としても、お前がいなくて淋しかったよ。」耳元で矢沢が囁く。

「嘘おっしゃい。3人の妻に囲まれてハーレム状態でしょ。」

カウンターの下で貴子は矢沢の脚を軽く蹴飛ばしてやつた。

まあな、と、矢沢は高笑いをした。白い歯となんの街いもない笑顔が眩しい。

「どういつもいつも勝手な事をいいやがる。間を取りもつのも大変なんだぜ。」

だが、優しい目をして、それでも女は全て可愛いものだよ、と付け加えた。

「本命の彼女はもうどれくらいになるんだつけ？」

「7年かな」

「いい加減に結婚してあげなさいよ」

「俺は一つの所に留まる男じゃないよ。」

いたずらっぽく矢沢は笑う。若い頃の矢沢は、凜々しい青年だった。今は目尻に皺が出来て、何も知らない青年ではなくなったけれど。若さゆえの固さが取れ、渋みを増した今の矢沢も大好きだ。ハートの暖かい人柄だが、よく口に焼けた強靭な肉体からは、野生の動物のように性的な磁力をも放つている。

ブルブルと震えるような音が微かにした。矢沢はそそくさとスーツの内ポケットを探り、携帯電話を取り出した。

メールが来たらしく、なにやら入力し、まめまめしく返信している姿が似つかわしくなかつた。

「貴方もメールも使えるようになつたのね」

「なに、仕事の呼び出しなんて面倒なだけね。これは愛を語る小道具みたいなものさ。」

見てみるかい?と差し出された携帯には、若い女の写真が載つていた。

「何よこれは?」

ピースサインをしている女の下にとペンキで描いたような「れいこだよ」というピンクの文字が、踊つている。

「綺麗な子じゃない」

少し腹立たしく感じながらも認めざるを得ない。

「もつともオツムの方はからつぽそうね」

「あ、ひょつとして妬いてるのか?」

「まさか。女が女を見る目は厳しいだけよ」

そんな貴子が可笑しくて堪らないといつよつと、矢沢は笑う。

「「Jの子とはあなたの会社の人なの？」

「いや。いわゆる“出会い系”ってヤツで出会い系」

本当に？貴子は驚きで目を丸くしている。

「あなたが出会い系に手を出すとは思にもしなかったわ」

貴子は少しがつかりした。

「俺とお前の仲じゃないか。固いJと言つなよ。」

Jの”よつJ”という人妻と、”ミーナ”という女子大生ともメールが繋がっているんだ。よつJとはメールだけだが、そつ遠くない内に会えるはずさ、と、年甲斐もなく嬉々としている。

「貴方の所の社員さんが、こんな滑稽な姿をみたらどう思つかしら？」

「とんだバカ社長だと呆れるだろ？」「

「出会い系の魅力って何？」

矢沢はこぶしを顎に当てる。

「スリルだな」

貴子は遠くを見ているよつと、矢沢の赤くなつた横顔を見つめた。

「飲み屋の女なんて、すぐに寄つてくるし、もう飽き飽きだね。だが、ここで約束するとするだろ？そして出会い。しかも見知らぬ相手との初めての対面だ。その緊張感がたまらないんだ。」

「いきなり、一晩だけの相手を見つけたりもする？」

「あるね。だが、そいつはさすがの俺でも難しい。相手は来るかどうかわからないよ。来ても、大抵は物影からこっちを物色してるんだから。」

「あら、女は男ようには簡単にいかなくってよ。ただ、快感を得られればいいわけじゃないもの。」

貴子は人差し指でグラスの縁をなぞった。

「今夜抱かれてもいい相手かどうか、生理的に受け付けられるだろうか、一晩でも心がときめくか。じつと考えているのだと思うわ」

「まるで”経験者”みたいな口振りだな」

「まさか。でも、うまく逢引に漕ぎ着けた事ある？」

「まあね。だが、いきなり抱くな、勝算は3割だな。」

「ねえ……」

「なんだ？」

「いきなり約束をして、ほぼ全員を抱ける男がいたとしたら、どんな人かしら」

「そんな奴はこの世にいないだろ。」

矢沢は笑ってロックを飲み干した。

「さつを言つていただじやないか。女つてのは警戒心が強い生き物なんだろ？」

矢沢は怪訝な顔で貴子の方を見た。

その言葉を頭に聞きながら、貴子はカウンターを見つめていた。

「お前、何を考えている？」

貴子は顏色ひとつ変えずに答える。

「何でもないわ。」

貴子は手を挙げてタクシーを止める。

「渋町へ」

「わかりました」

タクシーは動き出し、貴子は深く腰をかけ外を眺めた。

いくつもの灯りを追い越してゆく。

私は張り詰めたこの街が好きだ。

どこかで別れたら、一度とすれ違つ事もない街。

皆が他人同士の街。

私が張り詰めたこの街が好きなのは

自分自身も張り詰めて生きてきたからかもしれない。

時間が刻々と進んでいくのがわかるこの街の中

すれ違うのは他人ばかり

どこからこれだけの人間が溢れ出て、

みんなどこへ帰るのか

人が波のように押し寄せて

もひ、「物」のようにしか見えない。

それでも、それぞれに心を持ち

痛みをもち

あるときは喜び、ある時は悩みのどん底に陥るのだろう

でも、すべては他人事—

私がここまで来るまでの道程は長かった。

男もそう

何人の男が、私の上を通り過ぎただろう

そこには喜びもあつたけれど、

必ず終わり、といつものはつきまとひ

「いいで結構よ」

タクシーを止め、マンションへと帰る

12階のボタンを押し、エレベーターに写った自分の顔を、見た。

もう若くもない。焦りにもにた感情が、私を急かす。

このまま、沢山の砂粒のように

埋もれて過ぎてしまつていゝの？

人ひとりの存在が、とてつもなく軽いこの街で

田中貴子はベットの上でそわそわと落ち着かなく時計を見つめた。

今日もあの人は残業だろう。

新しい都市開発のプロジェクトとやらで、 1Jの所、 3時間も寝てい  
ない。

貴子は立ち上がり、居間へと向かつた。

重厚なカーテンを開け、夜の街並を見つめる。

「この最上階からは、巨大な大都市も全て一望する」ことが出来る。

「この夜景が貴子のお気に入りだつた。

けれど、今は、無情な淋しさを感じる。

一人きりの長い夜をずっと過ごしてきた。

あの人気が嫌いになつたわけではない。

むしろ愛している。

結婚という形は取れないけれど

この一人の自由な関係が私は気に入っている。

あの人は私との関係に満足しきっている

だからこそ安心感なのだろうけれど

「のままでもいいの？」

誰に会うわけでもないのに、貴子は化粧台に座る

私はまだ、綺麗かしら？

鏡の中でいろいろな表情を作つてみる

次の瞬間、まだ映つてもないはずの老いの影を、背中に見た。

たまらなくなり、貴子は枕を鏡に投げつけた。

貴子は自分が情けなくなった。

ベットの周りで振り回した枕は、羽根があちこちに飛び散ってしまった。

向こうの鏡台には、髪の毛を振り乱し、ビリショジョもなく憐れな自分がいた。

涙が顔中をぐしゃぐしゃになり、髪の毛は涙で顔に張り付いていた。

ハツとしたかのように、涙をタオルで拭い、髪の乱れを整えた。

キッチンでホットミルクを作ると、白い大きなカップが落ちないよう、両手で包むように、PCの前に向かう。

カツプに口をつけ、何かを決意したかのよつて、キーボードにせかせかと指先を走らせた。

部屋を作ると、3分もしないうちに、馨が飛び込んできた。

「じんばんは……」

kimi　じんばんは

馨　今日もkimiに会えて嬉しそよ

kimi　待つてくれたのね。『めんなさい…』。

馨　なんかkimiにしてほりせりしね。

kimi　うう。ちょっと開かつただけよ。

馨　昨日の今日だもんなあ。また話しあうよ。

kimi　いいのよ。

kimi　ううして話していくと、氣も紛れるわ。

馨　僕はいい暇つぶしかよー。（笑）

kimi　まあ、そんなとかじり？

馨 ひつどいなあ（苦笑）。今日ね、kimiが来る前にここに話していたんだよ。またひつかかりそうかも…。

kimi ほんとうに懲りない人ねえ。で、相手はどんな子？

馨 なんか大人っぽくてね。35歳だって。

kimi あなたは、年増好きなの？

馨 年増！？年増って言わないでよ！！

kimi あら、怒ったの？

馨 そりやそりや。あのね、女の魅力は30代からだよ。女盛りは40からって言ひじやん？？

kimi そんな諺あつたかしら。

馨 なくともいいの〜。僕ね、30歳からの大人の女人ばっかり集めた写真集を作りたいと思つた事あるよ。格好いい洋服を着てもらつて、ヘアメイクもバツチリでね。

kimi 馨クンが考える、「イイ女」を有名人で例えるとどんな女？

馨 そうねえ。もう2、30年若い江波杏子とか…。

kimi うんうん（笑）＾＾

k i m i つてどうしてそんな古い人を？

馨 レンタルで借りてみたんだ。y o u t u b eっていう動画サイトでもいろいろ見れたんだけど…。

k i m i うん。

馨 極め付きは欧陽非非だね！もうおん歳60超えてるみたいですが@ @ @

k i m i 欧陽非非！！（爆笑）

馨 いい女じやん（笑）。非非って、めっちゃ脚が綺麗なんだぞ。

k i m i まあ、確かに（笑）。

馨 まあ…ビアンチャットに欧陽非非は来ないだろうけどさ。

k i m i …つまり馨クンはセクシーな女性が好きなのね。

馨 そうそう。有名人なら、ライオンみたいな人が好きって事かな。こう野生動物のフェロモン全開！！みたいなw

k i m i 若い子には全く興味がないの？

馨 十代、二十代も相手がその気なら口説くよ。その年代でも、僕とかよっぽど大人の人がいるから。ただ…。

k i m i うん？

馨、そういう人でもね、チャットではなんせ話しが面白くないんだ。大人の人ってチャットでも深みがあるからね。

馨 チャットだって、恋したいじゃない？

kimi こんなバー・チャルな場所で？

馨 そうだよ。僕は断言できる。”チャットでもいつの間にか恋の深みにハマる事はある”ってね。

kimi 馨も経験済みなのね。

馨 そうだよ。僕も最初は遊んでたのと、仲間とオアシスみたいな時間を過ごしたかつただけなんだ。だから、恋愛はないだろうと思つてた。チャットはバー・チャルだと思うかもしだれど、やっぱり雰囲気とか、文字に出る人間的深みつてのがあるんだよ。

kimiは、普段はかけない眼鏡を上に持ち上げて直した。

kimi 初心者だからまだわからないけれど、そういう気分つてあるのね。

kimiはわざと他人事のよつと聞いてみる。

馨 ああ。ある意味、現実よりも濃かつたりする。文字だけなのに、相手の内面が感じられて、気がついた時には、現実なんてふつとばす。つまり、こっちの方がリアリティのある”現実”になつているんだ。

kimi ふふふ。馨は想像力豊かなね。

馨 妄想が逞しいともいう? (笑)

馨 でもね、僕、一度もネカマに引っ掛けた事がないんだぜ。

kimi ねかま??

馨 正式名称”ネットオカマ”。バー・チャル上でだけ、女になりすましている男の事だよ。現実はオカマでもなんでもなく、只の男なんだけどね。

kimi それって、気持ち悪いわね。

馨 うんうん。普段もオカマならいいけど、パソコン打っているその中身は男そのものだから。

kimi 私も遭遇する可能性はあるの?

馨 勿論。つていうか、ここネカマ多いよ。普通のサイトにいるネカマなら、変体趣味で笑えるぐらいのものだけど、ビアンの子を引つ掛けようとする馬鹿もたまにはいるらしいからのう。

kimi ネカマだと確信を持てる根拠は?

馨 カンだね。

kimi それだけ??

馨 そうだよ。僕ね、友達のサイトで遊んでいた事があるの。そこでは最初にルームに入った人がトンカチを持っていてさ。それがホ

スト。で、信頼できる仲間がいたら、その人にもホストトンカチをあげるわけ。

kimi ここの世界では馨は有名人ね。

馨 ネット上だけね（笑）。で、トンカチ持つていると、変な人とがきたら落とせるんだけれど、大抵最初に気がついて落とすのは僕の役目さ。

kimi ネカマじゃなくて落とされたらショックじゃない？

馨 そりやそうだ。

馨 僕も最初は”麗”に落とされて、3回挑戦したからね。一人称”僕”だしさ。

kimi 私も最初はびっくりしたもの。

馨 やっぱりそうか（爆）！みんなのチャットだとね、僕が問い合わせると、ネカマは白状するか自爆してすごい事になるから、誰も咎めないんだ。カンがない人が下手に落としたりすると、落とされた子が後で違う名前で入ってきて、僕にささやきってきて「さつきはショックだった」なんて事があるよ。

馨は嬉しそうに話している。

kimi 3回落とされても、挑戦したのは根性があるわね。

馨 根性なんてないよ。ただ、嬉しかったんだ。

k i m i うん?

馨 僕にはね、この世の中に、どこにも”居場所”なんてなかつたんだ。だから、初めてあのサイトをみつけた時には驚いた。「レズビアンのお部屋」って。「レズビアン」って書いてあるんだよ。しかも、そこでみんなが普通にキャッキャと雑談してるんだ。あの日が初めてだよ。「ここにいい居場所」を見つけたのは -。

k i m i だからネットにハマッたの。

馨 そうなんだ。ネットがなければ今頃僕は -。

k i m i うん?

馨 多分死にたいと思つたままだつたよ。

k i m i そんなに苦しかつたの?

馨 うん。でももういいんだ。ビル・ゲイツは天才だよ。難しいハードの事は置いておいて、僕らは救われた。ビルこそ僕らビアンの救世主なんだ。みんな気がついていないだけだね。

k i m i ビル・ゲイツがいなければ、私も馨とこづして出会つことはできなかつたわ。

馨 そうだよ。だから僕らはもつともつと感謝すべきなんだ。マイノリティにとってのエポックメイキングな出来事だよ！

馨 … センヒと言えば、kimiはネットをいつから始めたの？

kimi それが本当につい最近の話なの。ひょんな事からパソコンが手に入つてね。

馨 ふんふん。

kimi いろいろ遊んでこらへり、ここが田舎だったので。

馨 そうなんだ。

馨 ねえ、ちょっと気になつてた事があるんだ。ビアンサイトにいる方に聞くのも失礼だけれど。

kimi 言つて。

馨 kimiはビアンなの？

kimiはホットミルクを口元に寄せた。一口飲んでカップを置き、キーボードに指を奔らせた。

kimi もちろん私はビアンよ。

馨 そうだよね。

馨 変な事聞いて「メン！」

kimi 中学生ぐらいの時に、憧れている先輩がいたの。バスケットのキャプテンでね。

馨 うんうん

kimi 恋心に似た思いだつたわ。

馨 うん。

馨はたばこを吹かしながら、考えていた。中高生の時に同性に恋愛感情を抱くのはよくある事だ。とすると、この人は普通の性癖の人なのだろう。

kimi 馨、今「なんだ、ビアンじゃないのか」って思つたでしょ？

馨 なんで？

kimi すっと抜けちゃって。懶らじに子ねー！

馨 まあ、正直ちょっとと思つた。

kimi 馨にひとつては大した事じゃなくても、私にひとつては今まで切なくなる思い出なのよ。

馨 なんとなくわかるよ。

kimi 2年も片思いしてたの。だから、私もビアンの素質があるのね、きっと…。

ふと、馨に自分の嘘を見透かされたるような気がした。

「それにね」とkumiは慌てて付け足した。

「今、好きな人がいるの。もちろん女人の人よ。」

パソコンを切った後、kumiは机の前で動けないままだった。

「好きな人がいるの、もちろん女人の人よ」

私はどうしてあんな嘘を吐いてしまったのだろう?

馨は少しがつかりした様子と大いなる安堵を得たようだった。

「私は、ノンケ。あなたとは別の世界の人間なの」

どうしてそう正直に言えなかつたのだろう?

馨は「そつかあ」と言いながら、明るく去つて行つた。

あの子は感はいいけれど、素直な子だから、私の言ひ事をそのまま鵜呑みにしているだろう。

それでも私の「また明日つきあつてあげる」という申し出に、あつ

わざと「うんー」と楽しそうに返してきただけだ。

どうして私はパソコンなんてしてこるのだろう。

それも、夜な夜な、馨ばかりと話している。

それとも、私の嘘は気がついていて、知らないフリをしたのだろうか。

あの子なら、それも出来そうだ。

下手に気を回して、私を傷つけない為に。

明日、馨は本当に来るだろうか？

恋愛の相手にもならない、退屈しのぎをしていくだけの嫌な女だと  
思っているかしい。

そんな事は大した事のない事よ。だってリアルな世界じゃないもの。  
馨にとつても、私は数ある、通り過ぎて去っていく名もない女の一  
人に過ぎない。

考えを止めようとしても、堂々巡りになる夜があるものだ。部屋の  
明かりを消して、眠れないままベットにうずくまっていた。

いつしか、混沌が、私を暗く深い淵に落としていった。

馨はパソコンの前でついた肘をだらしなく崩して、「くふふ」を待っていた。

今は7時半。約束は9時だけれど。

なんでこんなに早くから部屋を作つて待つているんだひつ?

ウインンドウをむり一ツ開け、部屋の外からサイトを眺めてみる。

夜中は混雑を極めるこのサイトも、今の時間ではまだ空きが5つもある。

馨は@マークを左手でぽんぽんと打ち込んでエンターキーを押す。

「退屈だなあ……

だらしなく机の上で寝そべつたまま思わず呟く。

エンターキーをぽんぽん打ち込んでいると、

「変な子 サンが入室しました」

と出た。

馨 いんばんは？？？

変な子ね ？。

馨 いたずらですか？？

どうせネカマか、男が覗きにきたのだろう。

変な子ね ？。

馨 別にいいんだけど（笑）。

「変な子ね」サンが退室しました。と画面に映される。

また寝そべって、@マークをぽんぽんと打ち込む。

「馬鹿 サンが入室しました」

と、トピックが出た。

馨 はう？？？

馬鹿　：。

馬鹿　ばーか。

馨　い、いきなり馬鹿と言われてもw

馬鹿　早すぎるわよ。。

馨　んんん??

馬鹿　ちゃんとの時に行くからイイ子にしてなさい。

馬鹿　ネットナンパで遅れたらしらないからね。

馨　kimiかよ！（爆笑）

馨　わかつたわかつた。チャットHでもして時間潰してるわ～

馬鹿　バカ。。。。

kimiは微笑んでパソコンを閉じた。kimiは立ち上がり、浴びにシャワールームへと楽しげに

消えて行つた。

kimiはキツカリ9時に現れた。

馨は急いで起き上がり、入力を始める。

馨 わつきはぜひ（笑）

kimi おとなしくしてたのかしら？

馨 わあ??

kimi わてはまた何かやつてたのね。

馨 今日は不発弾だつてば^ ^

馨への親しみと裏腹に、貴子は、自分の世界を揺るがされてしまい  
そうな不安と、レズビアンという生き物への興味がむくむくと湧いてくるのを抑える事が出来なくなりそうだ。

その興味を、馨に悟られないようにせねば。

でも、聞かずにはいられなかつた。

「やういえば、この間の35歳の女はどうなつたの？」と。

馨 ああ、今日会つてみたよ。

kimi お茶でもしたの？

馨 僕がお茶だけするわけないでしょ。。。

kimi ハッチしたの！？

馨 した。

なんともなさげに、いつも正直に答える馨に驚く。

動搖を抑えながら、努めて軽く返信する。

kimi 簡単に言つわね（笑）。

kimi 私つていうこんなイイおんな女がいるのに馨つて人は。

馨 だつてkimiは僕のものにはならないじゃん。

kimi まあな？（笑）

kimi 私に期待してたの？

馨 バカか！（笑）。

kimi で、いきなり？

馨 いや、無理矢理つていうのは好きじゃないな。

kimi いつも無理矢理襲つてるくせに。

馨 まつたく人聞きが悪いな～（笑）。

馨 僕は見込みがない事には入れ込まない性質なの。だってエネルギーの無駄でしょ？

kimi 私は馨の「使い捨てカイロ」にはなりたくないわね。

馨 あのねえ。。。

馨 僕はいつだって真剣なんだよ？

kimi わかつているわよ

kimi で、今日のデートの首尾を教えなさいよ。

馨 ああ、今日はね、朝の10時から待ち合わせたんだ。JRの駅でね。

kimi リポビタンDは？

馨 リポビタンDね。はいはい。

馨 飲みたかった。でもkimiがうるさいからジュース飲んで待つてた。で、さとみさんが現れた、と。

kimi 「さとみさん」…ね（笑）

kimi それで？

馨 「では…参りましょつか」ってな感じで、そのまま歩いてホテ

ルに直行。

kimi 朝っぱらからセックスね。

馨 「セックス」って言つなあ。

kimi デうじて? 「セックス」は「セックス」じゃない。他に言い方があつて?

馨 いや、そつなんだけれど…。

馨 そつこつ事を堂々と言ふよつこなつたらオバサンだぞ。

kimi そつこえは若い頃は言わなかつたわね。まあいいじゃないの。

kimi わあ、話しき本筋に戻してね。

馨 平日は真面目だから、可憐い所に入れたの。ところがびつくり、フロントにお兄さんがいるわけ。

kimi あら。

馨 古びた所だつたら、「恨めしやー」みたいなオババが出てきて「いらっしゃーい。いつひつひ」ってな事もあるけれど、若いお兄ちゃんだから恥ずかしくてさ。

kimi 私はホテルでは女子同士の経験はないの。

kimi ねえ、断られたりはしないの?

馨 地方の子ならあるみたいだけれど、僕は一度も断られた事はないよ。

馨 都市部は寛大なのかなあ。

kimi 馨クンが男の子にしか見えなかつたとか。

馨 そうでもないよ。勘違いされても、近くによれば女とわかる程度だから。それに格好も昔ほど男っぽい格好にはしていない事多いしね。

kimi でも恥ずかしいのね。

馨 うん、めちゃくちゃ恥ずかしい……。

！ 馨 わとみさんは堂々としたもので、僕の方が「onsoonsoしたた（爆）

kimi なんだか日に浮かぶわ。それにしても…なぜ午前中から？

馨 フリータイムがあるんだよ。

kimi フリータイム？

馨 カラオケみたいなもの。その間、ずっとと時間を気にせずにいられるんだ。僕はさつさと事を致して、ハイやつたから出ましちつていうのが嫌いで。

馨 始めに、その女<sup>ひと</sup>がどんな女なのかを知りたいんだ。

kimi インタビューするの？

馨 そうだね。しばらくお話しを聞いていたいんだ。それからだよ、事を始めるのは。

kimi 馨が服を脱がせるの？

馨 うん。してもいいのか、とりあえず確認してから。

kimi 意外と慎重なのね。

馨 そうかな？

kimi 彼女は綺麗な人だったの？

馨 特別美人っていう訳じゃないよ。でも魅力がある人で。

馨 部屋に入つて話をしたら、「遠距離恋愛の彼女がいる」って言うんだよ。

kimi あらら。

馨 僕はそんな事聞いてなかつたよ！－彼女はいなつて聞いていたから、誘つたのに。。。

貴子は「女なら、それぐらいするわよ」と当然に感じつつも、馨の純情を可愛く思つた。

kimi ショックだったでしょ？

馨 ひどくへこんだよ。

馨 しかも、彼女の事を愛おしそうに延々と話すんだ。僕はうんうんと聞いていたんだけれど、頭の中は絶望的な気分に襲われていたわ。

kimi といひで… その、彼女はどこに住んでいるの？

馨 北海道だつて。

kimi 遠すぎるわね。

貴子は、だから一晩の相手として、最初から欺くつもりで、すんなりと夜の誘いを受けたのだと納得する。

馨 すごい美人らしいんだ、彼女。なんでバリタチもじきの僕と会う約束してくれたのかとハテナマークが浮かんだけれど。

kimi そんな話しきこれからセックスする時に言わなくていいのにね。

馨 僕がインタビューしたから仕方ないよ。聞かなければよかつた、

来るんじゃなかつた、つて頭を抱えたよ。

kimi 「僕は帰るー」つて言つてやればよかつたじやないの。

馨 そりなんだけど。

馨 もしかしたら、もしかして僕が抱いたら、僕の彼女になつてくれるかもしれないって、淡い希望がもたげたんだ。

甘いわね。相手は最初から、貴方を手玉に取つているの。

kimi で…したの？

馨 もう一回確かめてみた。そんな話しが後だから。

馨 「いいわよ」つて言ってくれたから、僕の彼女になつてくれるかもと思つたんだ。

kimi 素敵なセックスだった。

馨 ああ。その時は素敵だつた。でも今は素敵だつたと思えない。

kimi あら、美味しい思いをできたの。

kimi どうして素敵じゃないの？

馨 「昨日はありがとうございました」ってメールしたら

馨 「ひさびさに何回もイケてスッキリした。お陰で大好きな彼女と会えるまで耐えられるわ。私のペットにならない?」だって。

kimi :

kimi 馨?

馨から返答が返つてこないので、貴子は慌てた。

kimi 馨?いるの?

kimi 馨クン!

kimi 馨クン! !

kimi 馨つてば! !

馨 いるよ。

kimi 馨

馨が今、何を感じているのかkimiにはわかる気がした。

馨 ペットだなんて…。ぼくには魅力がなかつたんだ。

kimi 馨

kimi そんな事ない。

kimi あなたがわかつてないだけなの

kimi 馨を好きになってくれる人もいるわよ。

馨 慰めなんかいらないよー！

馨 kimiに僕の何がわかるっていつのまにー。

馨 本気で彼女を探して、このザマだ。みっともないこと思ひだろー！

貴子は何も言えなかつた。馨の悔しさが自分の事のよつと云つて  
くる。

kimi 泣かないで、馨

馨は机の前で両こぶしを握り締めていた。歯を噛み締めて、声も出  
さずに震えていた

kimi 馨。。。

kimi ピシヨシ。。。

馨から、返答がなかつた。今頃顔をくしゃくしゃにして、悔しくて  
泣いているに違ひなかつた。

貴子はじめく待つ事にした。

kimi おちついた?

馨 うん。

kimi よかつた。

馨 うん。

馨 なんでないてるってわかった?

kimi わかる気がしたの。

貴方は純粋すぎるから騙されるのよ、馨。

kimi あなたにはわからないだろ? けれど、貴女は騙されたのよ。

馨 そうなのか? 騙されたのか?

kimi ええ。

馨 本当に?

kimi 女という生き物に、ね。

馨はしばらく黙つて机を睨んでいた。

馨 嫌いだ

馨 だいつきらい

馨 女なんて、みんな死んじまえばいい

困つた。

確かに女は嘘吐きな動物だけれど。このまま女、そのものを嫌いになつてほしくはない。

どう切り抜けようか、貴子は素早く頭を巡らせた。

kimi そうね、馨。私も思つわ。

kimi 女なんてみんな死んじやえー！

人力した後、ちょっとふざけすぎかな、と感じ、貴子はハラハラしながら返事を待つた。

馨 あはは

馨 ちょっとスッキリした。

Picoの向こうで馨が笑つた気がした。

馨 でもみんな死んじゃ困るね。

kimi なぜ？

馨 kimiまでいなくなっちゃ困る。

kimi あら、ありがとう。

貴子は、胸が熱くなつた。

馨 kimiを、

kimi うん？

馨 僕のお父さんとお母さん死んじゃつたんだ。

kimi えつ…。

kimiは顔から血が引き、手から全ての力が抜けていくを感じた。

kimi いつ…亡くなつたの？

馨 二年前、僕が15の時だよ。NYにいたお父さんの仕事でね、二人がパーティに出るために乗った飛行機が墜落したんだ。

kimi :

馨 でもね、僕、お葬式でも涙も出なかつたんだ。

kimi いきなりだものね…。

馨 今でも実感が湧かないんだ。

馨 それに

馨は息を止めた。

馨 僕が殺したようなものなんだよ。

kimi どうこう事? どうしてそんな事をいつつの

馨 だから、早く死んでくれればいいと思ってたんだ。

kimi なんでそんなひどい事を…。

馨 二人は常識の塊みたいなまっすぐな人達なんだ。

kimi うん。

馨 とっても優しい人達なんだ。

kimi 馨を見てたらわかるわよ

馨 だから、僕が同性愛者だって知つたら、ママなんてきっと発狂してた。

kimi :

馨 そんな目に遭わせないで、何も知らずに天国へ行けてよかつた。

kimi :

馨 僕はね、こんな身体も、僕を受け入れない社会にも絶望していた。

馨 二人さえいなれば、とっくに死んでたはずだよ。ビアンのチヤットも知らなかつたしね。

kimi 正直に言えよかつたじやない！

kimi 親ならば、どんな事も許せるはずよ

馨 kimiは一人を知らないから。

馨 ママとパパの人生が終わるまで、僕は生ける屍だったのさ。

kimi 馨:

馨 僕が殺したんだ。そんな事思つていたから。

kimi め願いだから止めてよーーー。

馨 どうしてや?僕が殺したんだ。

kimi 馨が殺したんじゃない!!

馨 なんで見もしない僕に怒るの。

馨 どうせkimiには、どうする事もできないのに。

kimi できるわ。私の事を親だと思へなさいーーー。

馨 :

kimi 親と思えなかつたら、お姉さんでも、お兄さんでもなんでもいいから。

kimi 私が馨の新しい家族になるわ。

長い沈黙の後、画面に字が浮かび上がる。

馨 いろんな出来損ないの身体でもか

kimi うん…。

馨 レズビアンの変態でもか

kimi うん。

馨 僕が殺したのに？

kimi そんな事言つたら、天国のお父さんとお母さんが泣くわよ。

kimi あなたには新しい家族ができたの。だから一人ぼっちじゃない。

馨 僕が殺したんじゃないよね？

kimi 何言つてるの。事故だつたのよ…。

馨 うん…。

kimi 私は薫の家族だからね…。

馨 うん…。

その晩、動搖している馨が、一度とおかしな事を考へないようじ、私は子守唄のように、朝が明けるまで、お話を続けた。

kimi ねえ、馨

馨 うん

kimi 馨は誰かに愛されたいと思つてゐるけれど、誰に愛され

なくても、馨は馨よ。

馨 愛される魅力もない、タチか。

kimi また、僕の事知りもしないのにって思つて居るのでしょうか。

kimi でもね、さつきのバカ女よりは、馨の事、知つて居るつもりよ。

馨 …うそでもありがとう

kimi 嘘じやないつたら。これだけ真剣に言つてるんだからわかりなさい。

馨 そうか

馨 はつはつは

馨 なんだか、理解者がいると思つたら、昨日の事も笑えてきたかも。

kimi よかった。

貴子は心底ほつとした。

kimi なんだか、貴方の”ママ”みたいな気分だわ。

馨 え？

kimi 私は27つで言つてこたけれどあれは実は嘘なの。

kimi 本当は42歳のオバサンよ。

kimi うそ…。

kimi びっくりしただしょ？

kimi …。

kimi 言つておくけど、これでもモテルのよ。でも42歳じゃ、  
馨の話相手にしてもらえないと思つたの。

馨は、引いてしまつたのだろうか。返答までの時間が果てしなく長  
く感じる。

馨 ねえ。

kimi うん？

馨 じゃあ、僕の”ママ”になつて。

kimi 貴方のママ？

思いがけない答えに、kimiは戸惑つた。

馨 僕は、パソコンに出会いまで、誰にも自分の本当の気持ちを言えないままきたんだ。誰にも、だれにも…。

kimi うん…。つらかったわね。

馨 僕、kimiになら、なんでも話せそうな気がするんだ。本当のママには話せないだらう事も、悩みも苦しみも、全部相談できそうな気がする…。

馨 あと、本当のママに話したかった事を、全部話したいんだ。あと、ママにもっと優しくしたかった。代わりにkimiに優しくしたいんだ。

馨 だめかな…。

馨はドキドキしながら、kimiの返事を待った。

kimi 大きな子供がいきなり出来たもんだわね。

馨 kimi!!

馨はkimiが傍にいるのなら、抱きつきたい気分だった。

kimiは、いつの間にか流してしまった涙を小指で拭う。

kimi わあ、また明日から特訓よ。

kimi ママが馨をモテル男にする為にビシバシじゃわー！

馨 おつかないな（笑）。

馨 明日もお手合せ…じゃないか、『教授頼むとするかな。

kimi 私の特訓は甘くないわよ。

馨 そんなのまづかってりつて（笑）。

kimi アハハ

馨 今日は僕から先に落ちるから。

kimi ん？

馨 変じてるよ、ママ。

そつ言い残すと、いきなりチャットを落ちてしまった。

これでいいのだ。今日は馨を見送りたい気分だった。

なんて馨は可愛いのだろう。

私は子供ができなかつたから、その分を注いでしまつてゐるのだろうか。

馨が、どうして無性に女の身体を求めるのか、そして、どうしてゆつくりと大人の関係を結ぶ事ができないのか、パズルのように一つがつながっていく。

馨がわかり、自分も正直に年齢を打ち明け、ほっとすると、同時に不安にもなつた。

案外シャイなあの子は、恥ずかしくて、もう私と顔を合わせないのではないかと、ふと心配が頭を過ぎつた。

翌日、不安は的中した。

もう約束の9時を30分も過ぎたのに、馨は来ない。

9時35分に、馨は、やつと部屋に入つてきた。

馨　いんばんは…

馨は昨日泣いてしまつた事が照れくさくて、いそいそと入室した。

kimi 遅かったわね

馨  
すいません。

貴子はいつもより馨が他人行儀なのに気がつく

kimi  
どひしたの?

いや、どうもしないんだけれど。

kimi 昨日の事、気にしてるのね？

k i m i 恥ずかしがらなくつていいわよ。

二十一

kimi オナペツト馨

醫業

— — — — !

馨 やめてくれよ————— ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥

kimi 馨の電動二輪車はなかなか優秀つと

kimi めもめも

馨 めもすんな――！

kimi ママが馨をオナペシトとして派遣して…、出張費は500円で商売できるかしら?“うーん。

馨 ばかなんじやない?（呆）

kimi つていうか…なんかキャラクターが壊れてきてるわ

馨 そうね。最近ちょっとおかしいわ。

kimi 私らしくない…。シリアルで通ってきたの?。

馨 うへー（笑）。

馨 まじウケル（爆笑）！！

kimi 笑うといふじやないわよ。

馨 変わった女だなあ。

kimi 馨の方が変だわ

kimi 素直におなべつとこなつておけばこいものを。。。

馨 .....。

馨 .....。

馨 「えいこ@せせらぎ・あ もう@こふくまお

kimi 壊れないでー

馨 .....なつとけよかつたかもね。もつたいなことをしたーー！

kimi やっぱり断ったのね

馨 僕が了承すると思つてたのか？

kimi 女体好きな馨なら、ありえるわ。

馨 女体つて....まあ、大好きなのは否定しないけどや（笑）。

馨 エッチは大好きだけれど、愛される希望のないエッチは虚しいだけ

馨 愛されたいんだ

kimi うん

馨 誰でもいいから.....。

kimi ええつ？

kimi それまだめよ

馨 へへつ。

kimi つてこうか…

kimi 本当に「誰でもいい」と思つてる?

馨 うーん…

kimi 考えるとこかしり? (笑)

馨 いくら僕でも犬や猫はけよつと…。

kimi そういう問題なの!?

馨 いや、本当に「誰でもいい」訳じゃないみたい

kimi 他人事みたいに言つわねえ

馨 今考えてたんだよ。

馨 僕にもやつぱり「ちよつと違う」って事はあるよ。特にチャットはバーチャルだから。

kimi 思つていた人と違つた?

馨 うんうん。勝手に想像が膨らんじゃうんだよね、会つ前にね。

馨 で、会つたら、「ええ――?」ってな事はあるよ。

kimi もじ工する約束してたりびつするのかじら。

馨 それはキッチンビジ馳走になりますよ（笑）

kimi 好き嫌いなくなんでも食べるのね。

貴子はちゅうと嫌味を込めて言つてやつた。

kimi Hがしたいのか彼女が欲しいのかどちらのよ

馨 Hもしたいけれど、そこから彼女を探してるんだ。

kimi 解り難いわ

馨 なんて説明したらいいんだろう…。

馨はパソコンのディスプレイの前で頭を搔いた。

馨 僕はね、最初に抱かないと安心できないんだ。どこかに相手が離れていってしまうような気がして、不安で不安で仕方ない。

馨 だから、抱いてしまえば、僕は安心できるんだ。

kimi それじゃあ、「セックス依存症」じゃない？

kimi もう少し余裕をもってみたらどうかしじ

kimi いきなり抱こうとするのではなく、デートを重ねてみた  
じうじうなの？

馨 僕には無理だね。

馨 駄目なんだ。離れてしまいそうで、不安で不安で仕方ないんだ。

それはきっと、馨のどこかに、何か埋められないものがあるからだわ、と貴子は分析する。

kimi チヤットにトピックを入れる欄があるじゃない？

kimi あの欄にはいつもなんて入れてるの？

馨 kimiが最初に入ってくれた時と同じだよ。「近くの人、お話ししましょう」。

kimi それだけ？

馨 「近隣で、実際に会える人来て下さい」の方がほとんどだね。  
kimi だからよ、きっと。

馨 んん？

どつりで、セックスばかりが目的の女が集まるのはそのせいだ。  
馨がそのセックスを通して、初めて安心して口説けるようになると

このだから、話はやせっこ。

ki mi で、どうもうつしたるよつて話しが持つてこくのか教えてくれる?

馨 まず、年齢、自己紹介、そして雑談をして、話しが合えば、「近々、デートしませんか? ハッキもありで。」ってこつ風に。

ki mi なんといふストレートな!

ki mi だつて、いじめやうこつ場所はないじゃない?

馨 そつこつ場所つて?

貴子は、以前の職場のレイコと今の彼氏は出会い系で知り合つて、今でも続いているらしい。

「あなたみたいな子でも出会い系をつかうの?」

「ヤですね、先輩。今時当たり前ですよ!」

「あ、ついでにレイコは肩をすくめた。

「すみません。つに友達言葉になっちゃって…」

ほんとすまなそう小さくなつているレイコに貴子は笑つて肩を叩いた。

「いいのよ。私の世代には馴染みがないものだから。」

ペラッヒレイコは小ねく舌をだした。

「これが今の彼なんです。」

貴子は田を見開いた。

「カツコいじやない！」

お世辞でも社交辞令でもなく、白いマフラーを巻いた彼は、爽やかな目をした好青年だった。

レイコは嬉しそうに

「彼は今、弁護士になる勉強をしているんです。試験が近くなるとかなかメールしてこなくなるから、「もう大嫌い！」とか入れると、焦つてメールを送つてくるのが可愛くて」

「なんだか彼、モテそうじやない？」

「実はそうなんです。彼の学校の女の子がちょっとかい出していくの。頭にきてケンカになつたんですけど…」

レイコは声をひそめた。

「実は私の方が3人と付き合つた時期があつたりして」貴子はレイコの顔をまじまじと見てしまつた。ちゃめつ氣たつぱりで、人懐っこくて、くるくると大きな目をしたこの素直そうな子が三股を？

ギャップに動搖したのを胸に抑えた。

「いまたかしくんとは、このサイトで知り合つたんだけれど…」とレイコは携帯をチャカチャカ動かしながら、「ここにも入つていた事があつて。でもたかしと付き合つてからは、覗く程度だけれど」。

先輩もどうですか？などと無邪気に薦める。

「ここは、ラブラブ恋人募集のコーナーで、ここは純愛プラトニックコーナー。で、ここは…」レイコはウフフと堪えきれない様子だ。

「何よ？」「今日会える人コーナー。つまり、時間空いてる者同士が、今からエッチしようコーナー…！」きやははとレイコは無邪気に笑つた。「みて、こいつ」。そこには茶髪でランニング姿のいきがつた若者が斜めに身体を向けてこちらを見つめている。

「今、暇だよお。俺といい事しない？だつてー」レイコはいつたん笑い出すと止まらない。

「こんな誘いに乗る子がいるのかしら？」貴子は少々呆れながら、写真の少年を見ていた。

「こなからあるんだよ。レイコも一回だけ行った事がありますよお」

「ウッソオー！」

「先輩、声が大きいですって」レイコはからから辺りを見回したが、実は大して気にも留めてそなれなかったで、更に活き活きと勢いづいている。

「実は3回試みた事があつたじして」とペロッと舌を出す。

「で、どうだつた？」

レイコが嬉しそうに田舎を輝かせる。

「コンビニで待ち合わせをしたんですけど、じーっと遠くから見ていたら、それらしき男がいたんですよね。」

「うんうん

「格好はいいんだけど、私、無精ひげを生やしている人は嫌いなんです。だから……そのままダッシュで帰っちゃった

悪びれる様子もなくレイコはからからと笑う。

「あと2回は？」

「ひとりは叔父さんだから逃げちゃった。あと一人は、約束はしたんですねけれど……」

「ん？」

「その人は一週間後つて指定してきたんですよ。」

「それが何か問題あるの?」

「大アリですって。ああいうのは、その場の勢いがあるから行けるものでしょ。一週間も生活

してたら、その間に「あー、馬鹿な事約束しちやつた。もうしたい気分じやないし」って冷静

になりますよ。」

「あはは、それはわかるわ」

「でしょ？レイコの友達で実際にしあわう子がいるんだけれど、その子も、「今すぐ」ならば行くけれど、日程を「ゴチャゴチャ先延ばしにされたらまず100パー行かない。」

女の欲望って、そんなものよね」貴子もそれはわかる。

男はいつでもやりたい動物だけれど、女は日常生活が始まると正気に戻るもの。

その疑問を醫にもぶつけてみたい気がした。

馨 うん?

kimi じゃね「Hのできる人コーナー」つていうチャットがないでしょ。

馨 わかつてないなあ。ピアンサイトにそんなものあつてもガラガラだつてば。

kimi あらざつして?

馨 わかりやすく説明しようか。

kimi お願いするわ。

馨 kimi、発展場つて知つてる?

kimi 何よそれは?

馨 ゲイが集まる場所があるんだ。サウナとか映画館とかね。そこで見知らぬ同士がいたすわけなんだけれど。

kimi いたす、ってセックスの事?

馨 うん。

kimi つまりは発展場=乱交場つてことなのね!

馨 亂交つて（爆）！まあ、近いけれども、ちょっと違つ。

kimi どうこうひがひ違つかしさ。

馨 あくまでそこに出会った、自分の好みの相手を抱くわけ。

kimi 亂交じゃなくって、一対一なのね。

馨 ビンゴ！

kimi 想像できない。私には異次元の世界だわ。

頭がくらべらしそうになりながらも、話を元に戻さなければと貴子は慌てた。

kimi それが、ビアンには「Hのできる人コーナー」っていうチャットが出来ないっていう事と、どういう関係があるわけなのよ。

馨 わかるよ(づから、ちょっと待つて。

馨 ゲイのハッテンバは、日本全国にあるのに、ビアンにはハッテンバがないといつのはどうしてでしょう。

kimi ビアンは性に関して、選り好みをするって事？

馨 まあ、そんな感じ。危険面をクリアしても無理な部分がある。つまり、さあHしましょ(づか)ていうチャットを作つても、ビアンの場合にはガラガラになるよ。

kimi あら、それは普通の女も一緒よ？

kimi 余程のハプニングでもない限り、好きな男としかセックスしないもの。

馨 そう。ビアンも女の子だからね。

馨 特に受け、つまりネコはね。

kimi ノンケの女子より堅いのかしい。

馨 それはまさしくしいね。この世界の方が、よほどプライバシークなんだよ。

kimi ほんとかしら?

馨 嘘だと思つたら、どこかのチャットで聞いていた人(笑)。

馨の言つてゐる事と、馨のやつててゐる事は、随分と矛盾してて、うな気がする。

馨は攻める側だから、男みたいなものなのだろうけれど、相手のネコは?

慎重なはずのビアンの女達は、なぜ、いつもかと、馨の申し出を断けるのだらう。

kimi ねえ、馨クン

馨 うん?

kimi じゃつてパソコンのサイトじゃない

馨 そうだよ?

馨 どうしたの? いきなり…。

kimi このサイトがもし、携帯なら、今からエッチしましょう、とか、外出中にも入れられて便利なのにね

馨 言われてみればそうだねえへへ。

kimi 普通の男女の出会い系サイト見た事ある?

馨 あるわけないじゃん。僕はビアンだもん。

kimi ねえ、馨はこのツーショットで会つ約束するとするじやない。

馨 うん。

kimi パソコンで約束したら、速攻で抱くの?

まさか!と馨が笑う。

馨 まず向こうの都合を聞いて、聞いてそいつな口に決めるね。だから大抵は土曜日の夜とかになるよ。

kimi とにかくね、チャットしてから数日後になるわけね。

馨 そうやう。

kimi その間、忘れられないよう相手にメールしたりするのね。

馨 いや、特に僕からしないよ。今前回が忘れちゃうんじゃないからなんだかイヤだもん。

kimi あまつ口が開くと、向こうが忘れちゃうんじゃないから

馨 あはは。10日ぐらい忘れないよ（笑）。

kimi なるほどね。

kimi は赤い万年筆をピタリと顎に当てる、ディスプレイに[印]る馨の文字を見つめていた。

馨 どうしたの？

kimi ああ。私なら、次の日に朝食を食べたら「ああ、変な子と可笑しな約束しちゃつたわ」で、馨の事忘れちゃつわね。

馨 ひどい女だなあ（笑）。

ひどいのは一体どうしかしちゃ？

明日は約束があるからチャットに来れないでしょ！めんね。

そう言って去つて行つた馨。

スタンドを消して、ベットに潜り込む。

暗い部屋の中で私は考える。

明日も貴方はまた

わたしのじらない女を抱くのね

私は複雑な思いに駆られた。

翌々日の約束を私は破つた。

馨はそれでも次の日も部屋を作り、私を待っていた。

kimi ハーイ。馨。

馨 昨夜はどうして来てくれなかつたの？

馨は少し怒つているようだ。

kimi 私も毎日暇な訳じゃないのよ。

馨 そうか…。

馨 kimiに会わないと、僕はなんだか全てここやる気がなくなってしまう。

kimi ジめんなれ。

kimi で…、昨日の密会はどうだったの？

恐る恐る訊ねてみる。

馨 加奈子さんっていう人だつたんだけど、まず加奈子さんに案内されて、和食のお店に行つたんだ。

馨 なんか小さな口の粒が敷き詰めてある、長い庭を通りてね。

kimi 高級そつなお店ね。

馨 そう。なんか街の中にあるのに、いきなり和の別世界だよ。

馨 一人だけの個室に案内されて、すぐ緊張した。

kimi 緊張して味が解らなかつたとか？（笑）。

馨 最初は何がなんだかもう（苦笑）。後から段々味が解るようになつたら、日茶苦茶美味しい事に気がついたんだ。

kimi で… 加奈子さんは綺麗だった？

馨 うん！美人だったよ！

馨 （ウットリ）。

kimi 幸せな子ね。でも、それからどうしたの？

馨 お金を払おうとしたらいつから「いいから」って手を抑えられて。

馨 会計立てて4万8千円也…

kimi 彼女はお金持ちなのね。

馨 口クにお酒も飲んでいないのに…。

kimi 馨にとってはそんな豪華な食事は初めて？

馨 あそこまではないよ。中産階級の子供だもん（笑）。

馨 和食も極めると田茶苦茶美味しいものなんだなあ…。

kimi それからどうしたの？

馨 加奈子さんのお気に入りのバーに連れて行つてもらつたんだ。

kimi うとう。

馨 そこも凄かった。

馨 グランドピアノを演奏してて、みんなお金持ちそうで。

kimi アハハ！！

馨 「僕、こんな格好してきてよかつたのかな??」ってオロオロしたつていうの（笑）。

馨 世の中には僕の知らないワールドが存在するものなんだなあ…（ハハハ）。

kimi そつよ。馨が知らないだけ。

馨 kimiはねつこう所に行つた事あるの？

kimi ないわよ。

馨 じゃあ僕とおんなじじゃん。

kimi 悪かつたわねー。

kimi で、それから？

馨 シコタマ飲んじゃったよ。優しい人で、僕がお酒好きなの見抜いたのが、「どんどん飲んで」って。

馨 グラスの残りがまだあるのに、すぐにボーアイさんを呼んでくれるんだ（感慨）。

kimi ふむふむ。。。

馨 いろいろなお酒を知ってるみたいでね、「なんとかなんとかがいわよ」って、お酒のウンチクから説明してくれてね。

馨 なんだっけ。「タンカレー」とかいうカクテルも勧めてくれて。

kimi それを言つなら、「タンカレー」よ（笑）。

馨 そうそう。「カレーみたいな名前だな」って思つたの思い出した。

馨 アハハ。

kimi 「タンカレー」はかなりアルコールがキツクなかつたかしら？

馨 舌が焼けるかと思つたよ（笑）。で、タンカレー？で僕はノッ

クアウトされちゃったんだ。

馨 もう頭がフラフラになつてさ…。

kimi 彼女がトイレに連れていつてくれた?

馨 ううん。「大丈夫?」ってそのまま外に連れ出してくれて、ちよつと歩いたかと思ったら、そこが彼女の自宅だつたんだ。

kimi 直接自宅?

馨 うん。そりだよ。

kimiは頭を巡らせた。女が見ず知らずの初対面の相手を、ホテルではなく、家に上げるなんて!

馨 彼女は先にベッドに潜り込んだんだ。真っ暗でさ。このまま一人で寝た方がいいのか、立つたままオロオロしてたら、彼女がベッドに招き入れたんだ。

kimi それで?

馨 彼女が僕の頭を胸に抱え込んだんだ。たまらなくなつて夢中で吸つたよ。

馨 気持ちいいおっぱいだつたな…。

馨は勝手に夢見心地になつてている。

kimi の胸の中で、突然、何かが沸点に達した。

kimi もうたぐさんよ！あなたの戯言なんて！！

馨 デウしたんだよ、kimi！

kimi あんたはこつまでも、そつやつて女を口説いていればいいわ。

kimi どうせ誰ひとり、あなたの事を愛してはくれないでしょうけれどね。

馨 なんでいきなりそんなひどい事を言つた？

kimi あんたは毎度毎度、「あんな女と寝た、こんな女と寝た」そればっかり壊れたレコードみたいに繰り返し人に聞かせるつもり？

馨 kimiは僕の全てを受け入れてくれたんじゃなかつたの？

kimi 誰がウダウダくだらない、女々しいヤツなんか受け入れてやるもんですか。

馨 僕のママを辞めるつもり？

kimi ママ、ママってね。他人のガキの、泣いた喚いた、やつたをマリア様みたいに受け止められると想つてるのー。

馨 ひどいよ、kimi。

kimi いいこと、あなたは最初から私にも、女にも、騙されっぱなしのよ。

馨はヤシの前で身体がぶるぶる震えるのを抑えきれなかつた。

馨 もうここよー何が「ママになつてやる」だ。何が「全部受け止めてあげる」だ。所詮やうらの女と一緒にしゃないか!

kimi 結構。これで私もせいせいやるわ。

馨はギリギリと壊れるせじに壊れるせじに食こしづつていた。

馨 僕だって、嘘ツキのオバサンなんか、もうバイバイだ!一度と僕の前に現れるなー!

kimi 望むところ。

kimi じゃあね。

kimiはスイッチを押して、ヤシと切つてしまつた。

これでいいのだ。

これで私は、無くした「愛」などとこゝもの反感わざわざに済む。

何よりも、社会の常識から逸脱した、おかしな性の世界にひきこまげれずに、まつとうな人間として、胸を張つて生きてこけるのだ。

スッキリしたはずなのに

寝ようとしても、なかなか寝付けない。

kimeは起き上がってスタンドを付けた。

細い外国製の煙草に火をつける

びついたの？

私とある「ものが

何を考えているのよ。

私から見つめれば

あの子はただの子供じゃない

しかも不可解な世界の

レズビアンだつて。笑っちゃうじゃないの。

レズビアンの癖に

愛だの恋だの嘆いたやつて滑稽だわ。

「ママが一番すきだ

馨の嬉しそうな、画面から飛び出てしまってそうな喜びが一瞬浮かんで、手をはらった。

真っ赤なローブのまま立ち上がり

焦げ茶色の戸棚に這いつく

少し乱暴に扉を開けて

ヘネシーを取り出した。

苛々としながら蓋を開けてウイスキーグラスに注ぐ。

砕かれた樹氷のような氷を浮かべて。

酔いが回れば忘れてしまつものよ

貴子はヘネシーを煽つた。

わたしはベットサイドに床る

あの人気が今日も帰つてこないのが幸いだつた。

ヘネシーに口をつけ、片手に煙草を挟みながら、私はつなだれた。

「 もうたぐわん！」

餓鬼のたわごとに付き合ひのままひびらだわ。

こんな世界がある事なんて

私は知らなかつたのに

いつそ知らなければ

あんな馬鹿な子を育てよつなどと

あんな女ぐるいのガキを。

見守つてあげたいなどと思わなかつたのに。

馨は机にうつ伏せになつたまま、右手でキーボードを叩いていた。

もう2時間もいましたまだ。

誰かが入室してきた気配がして、ハツと起き上がった。

馨 僕が悪かつたよ!!

バカある 悪かつたって何が???

馨 ジめん、間違えた。。。。

馨 つて君はいつたい???

バカある たあね(笑)。

バカある ふふん。

薰 ???

薰 バカあるって..。

バカある 入りなおすよ

バカある さんが退出しました。ヒティスプレイに表示され、すぐ  
にまた誰かが入室すると、部屋はロックされた。

美樹 これでわかった？

馨 まつたく。。また邪魔しに来たのかよ（笑）。

美樹 ふふん。

美樹 このくそばか馨め

馨 はあ??

美樹 このあいだ、「ゆか」で入つてみたのに気がつかなかつたらう?

馨 あー、14歳、彼女からメールが来なくて悩んでた子つて…まさか。

美樹 そつそ。

美樹 お前にしちゃ二ブイな。

馨 あれは完璧に騙された!!!

馨 僕としたことが…。

美樹 で、何やつてんの?。

美樹 二日間も・kimeさん待ち・とかなんとかボーッとしてしゃつて。

馨 よく見てるナ一（笑）

美樹 で、kinekoをひとやひむ？

馨 友達なんだ。

馨 友達であり、ママでもある。

美樹 なんだそつや？

突拍子もない事を言うのが馨のバカ正直で面白い所だけれど、それがに「ママ」には呆れた。

美樹 で、そのママから待ちぼうけってヤツかwww

馨 はうなだれた。

美樹 おい、なんか話せよ。チャット部屋開いてるんだろ。

馨 なんか、駄目なんだ…。

美樹 なんでその人がお前の「ママ」なんだよ。

馨 僕が女の子に振られて落ち込んでたら、僕のママになってくれるって言つてくれたんだ。

美樹 それで引いたんだろ

馨 …。

美樹 ネット上だろうが、”ママ”呼ばわつされてさ

ふふんと美樹は鼻で笑つた。

馨 kiみはそんな人じやないよ。

美樹 どうしてそんな事が言える?

馨 僕の”ママ”になつてくれるつて、ちゃんと約束したんだ。

美樹は、キーボードに両手を置きながら、チッと舌打ちをした。

馨 …。

美樹 おまいの両親の事は残念だつたけれどさ。

馨 うん。

美樹 優しいママだつたんだつてな。

馨 ありえないほど、僕には優しい女ひとだつた。

馨は、喪服のまま、一人ぼっちで海を見に脱走したのを思い出していた。

なぜ僕を置いて、二人は行つてしまつたのだろう。

いなければいいと思つていたのに

いなくなつたら、『どうここのかわからぬ事だらけになつた。

美樹 ママは置いておこり、じつじつおまえは、年上ばっかりナン  
パする?

美樹 美樹 小さい頃は、同級生の女を好きだつたんだろう?

馨 わからない。

馨 もうと、あの時と今は好みが変わつたんだよ。

馨 ははつとして入れなおした。

馨 メミコは違つよ。家族として愛してゐるんだ。

美樹 ”永遠の母親” みたいな存在としてかもな。

馨 …。

美樹にはピーンと来た。

馨 やはりママ「ママ」がいやだったのかな…。

美樹 それもね。母性愛を感じると同時に、気持ち悪くなる事もある  
だろ?

馨 はしょぼんとパソコンの前で頭を垂れている。

美樹 そのケンカの時、何を話していた？

馨 この間会った、女人の事だよ。

美樹 うんうん。

美樹 どこからケンカが始まった？

馨 豪華な和食を食べて、バーに行って、そのままフラフラになつたら、お家に連れていってくれたんだ。

美樹 それから？

馨 彼女のベットで胸触ったところまでは普通に話してたよ。

美樹はイライラして頭を搔き鳴つた。

美樹 馨さ。

馨 うん？

美樹 まったくいつもながら…。

二ブイと言いたい気持ちをぐつと堪えた。

美樹 母である前に、ki ni tsuさんは女だぜ。

馨 どうしてだよ？

馨　kimeはママだよ。寝る女じゃない。

美樹　向こうはそれだけじゃないかもしないじゃないか。

馨　は？

馨は思わず笑ってしまった。

馨　楽しく話しているだけ。kimeにはそんな気はまったくないよ。

美樹　だつたらどうしてそこで怒る？

馨　いや……。

馨は顔が真っ赤になつた。

美樹　意識しばじめたんだろ？

力アアと顔が火照つてくる。

美樹　歳はいくつなのさ

馨　42だつて。

美樹　27ぐらいかと思ったよ。それじゃ本当に親子みたいな歳の差だぞ

馨 …。

美樹 馨

馨 うん?

美樹 マザーラコンプレックスと性欲を刺激されているんだろう。

馨 何言つてんだよ!

美樹 図星だな

馨 それに、kimiには付き合っている人がいるんだ。

美樹 そうなのか??

馨 それっぽい事を言つてたよ。

馨 だからママでいいんだ。家族でいいんだって。

美樹 嘘吐け。心の奥に無理矢理しまつてはいるだけだ。

馨 嘘じゃないよ!

美樹 私を舐めるな

馨 ついでに馨の頭の中も覗いてやるわ。

馨 ヤメて

-----!

!

馨は頭の前で手をクロスして遮ろうとした。だけど、ゾワゾワと寒気がしたかと思うと、

頭の中が青と白の渦巻きでいつぱいになつた。

ハタとうつ伏せで氣を失つていた事に氣がついて、ふらふらと揺れる頭を叩いた。

馨 何分ぐらいたつた

美樹 3分

馨 また氣を失つてたよ…。

美樹 知つてるwww

美樹 まあ、手元のココアでも飲んで落ち着け。

ハツと机を見ると、確かに自分が作ったココアが置いてある。

美樹 もう忘れたのか?砂糖3杯は入れすぎだぞ。

馨 よけいなおせわだつてば。

馨は「コアを飲みながら膨れつ面をした。

美樹 落ち着いたか？

馨 落ち着くじいの騒ぎじゃねーよ。まつたぐ。。。

美樹 お前の頭の中を教えてやろう。

馨 いいつて…！

美樹 お前はそのキミとやらの裸体を想像したな…。

馨 もういいから、や…

美樹 胸を触っている

馨 そんな事ないつて…！

美樹 ママを愛し始めたな。

馨 違うよー！

美樹 顔が想像できないから、カオナシを抱いておるな。

馨 いいじゃないか！想像がつかないんだから！

馨はキーボードに顔をつけてへたり込んでしまった。

馨 はー。。

美樹 見事なもんじやろ？え？

馨 …まったく、とんでもない知り合いを持ったもんだよ。。

馨 顔と中身のギャップが違すぎるよ！！

美樹 美少女靈媒師で売り出しそうかなー

馨 悪徳靈媒師とかで捕まるよ。

馨 お前といたら、人の脳みそのプライバシーもへつたくれもない  
じやん。。。

美樹 妄想ばかりして、その癖、口説かないつもりだろ？

馨 人のモノを取つたら可愛そつだろ？が！

美樹 わかつてないな、恋愛は奪い取るもんじや。

美樹 男も女も激しいバトルを繰り広げているのじやぞ。いっけん  
二コ二コ 穏やかそうな

顔をしながら…。

馨 僕の趣味じやないよ。

馨 ただでさえチャンスの少ない世界で人のモノを奪えないよ。。

美樹 嘘つけ。私の身体も奪つたくせに！！

馨 あれは合意だろ？。。

馨 でも、美樹は僕の事好きになつてくれなかつたよ。

美樹 オマイさんは私の好みではないからナーッ

馨 。。

美樹 タイプがちょっと違うだけや。

馨 美樹のタイプってどんなの？

美樹 もっと逞しくて、生活能力があつて、自立してるヤツだ。

馨 そりゃ僕には程遠いよね（笑）。

美樹 その通りwwwへなちょこ馨には100年早い！！

勝ち誇つたように美樹は高笑いした。

美樹 それと追いかけられるのはつまらん。

馨 ふむふむ。

美樹 追いかけてたと思ったら、逆に追いかけられたからつまらなくなつたのじや。

馨 じゃあ、なんで時々僕と変な事してたの？

美樹 友達だから。

馨 んんん…。

馨の頭の中はハテナマークでいっぱいになつた。

馨 友達って、エッチもするものなの?

美樹 そういう。

美樹 仲のいい友達はエッチするのじや。

馨 うーん。

美樹 オマイは「ママ、ママ」って煩いのが面白い

美樹 人の胸吸いながら、「まま〜〜」はないだろ?が…。

馨 だつて…

馨 自分でもわかんないんだけど安心するんだ。

美樹 このマザコンが!

美樹 すぐびーびー泣くのも面白いw

馨 人の少年心を弄びやがつて…。

美樹 友達と恋人を毎度勘違ひするからな。学習しない面倒くさいヤツじや。

馨 はあ～…（ためこせ）。

美樹  
で、もうひとつ。おまいは大きな勘違いしておる。

馨  
何が？？

わたしは18と言つたが、本当は14じや。

?

馨  
まへたく

馨 はあ。。

美樹  
イジメ甲斐のある奴っちゃんのつ。

美樹 ふおつ ふおつ ふお。

馨 ふおつふおつじやねーみーー!

# 美樹 嘘じや、18じや。

美樹 本当に弄り甲斐のある奴じゃ

馨  
…びつべつしたじやん。

馨  
心臓止まるかと思つた。

美樹 かわいいのう。

美樹 そんなお前を好きになってしまいそう（はあと）。

馨 ほ、ほんちょに？？

美樹 ウ・ソ。

馨 げえええええー。

美樹 …明日休みだろ

馨 うん

美樹 待ちぼうけで泣きたい気分なんだろ

馨 うん…。

美樹 話聞いてやるから来い。いつものマクドナルドでいいな。

馨 ありがとう。

馨 変なやつだけど優しいな。。。。

美樹 またびーびー泣く！！

美樹 いいから朝10時に来いよ。遅いから早く寝ろ！-！

「じょひー。」

美樹はハンバーガーを食べながら片手を上げた。

「いようつて。…呑氣だね」 馨はげつせりしてくる。

「遅いぞ。遅刻魔がある。」

「5時に寝たから起きれなくてさ。」

馨は椅子を引いてテーブルに座る。

「ビッグマックセットかよ。朝からよく食べる奴だなあ。」

「腹が減ると居ても立ってもいられなくなるじゃん。」

「しかもポテトもジュースもしかよ!」

いちいちひるさいな、と馨は遮った。

「5時に寝たつて、あれからまたチャットしてたのか?」

「いや…。」

「眠れなかつたのか」

「考えすぎなんだろ?うな。」

馨は頭を搔いた。

美樹はストローでジュースを飲みながら、その大きな瞳で馨をじつ

と見つめた。

「何かついてる？」

「いや」

美樹は薄茶色のくぬぐると柔らかそうな天然のウエーブがかかつている。

どうしてこいつがビアンなんだろう？

男が寄り付きすぎでうざつたくなったのだろうか。

馨はどうぞまごして黙り込んでしまった。

「なに恥ずかしがってるんだ？」

「恥ずかしがってなんかないって。」 馨は手を顔の前で大きく振つた。

「相変わらずアンドロイドみたいな奴だな、と思つても。作り物みたいな顔してるよな。」

美樹はテープルに乗り出しきた。

「私の顔は天然物だ。お前にそپチ整形してるんじゃないのか？」

「してるわけねーだろ！」

臉に触れようとした美樹の手を身体を捻つて避ける。

「長い睫毛だな。このストローのせてみていいか？」

美樹はストローを紙カップから取り出した。

「やめろちゅーの！」

ふふんと不敵な笑みを浮かべて美樹は椅子に座りなおした。

「私は醤油顔が好みだ。お前は濃すぎて…」

「おまえの好みは聞いてないから…」

なんなんだよ、変な奴、と馨はぶつくさビッグマックにかぶりつく。

美樹は鏡を取り出して、メイクを直している。

「いいよな、ネコは。」

「は？」

「まんまの外見でいいからや」

美樹はぷつと笑った。

「馨も女装してるつもりだらうけじや」

「けじや？」

「ぜんぜん女装になつてないからやあ」

「これでも気を使つているつもりだよ？」

「まあ、ボーアッシュな女の子ぐらうには見えないこともない」

「女に見えりや、それでいい」

「なんどよ」

「いろいろ面倒だからさ。あれこれ噂話しお立てられや。」

「そんなの気にしちゃ自分らしくいられないよ」

「わかつたような事いわないでよ」

馨が真剣な顔をしたので、美樹は目を大きく見開いた。

「普通にこの社会の一員として、目立たないよつに生きていかなきやいけないんだって。」

「小心者だな。お前は。」

馨はムツとした。

「ネコに何が解る？」

美樹は鏡を見たまま、

「まあ、むきにならなくていいから」

とせつなく答えたので、馨も意を削がれてしまった。

「なんか今日はこりこりしてるなあ。」

「「」めん。」

馨は片手をテーブルについて頭を抱えた。

「僕、美樹に嘘ついてる事が一つある」

「何？」

思いつめたようにつづむいたまま馨がつぶやいた。

「彼女は普通の人だと思う」

えつ？と美樹が驚いたのがわかつた。

「…ノンケってこと？」

「うん」

「なんでわかる？」

「最初はわからなかつたんだけどね。昨日いろいろ考えたら、話が合つんだ。」

「それが何か問題なの？」

「たまたま、退屈しのぎに入ってきたんだよ。だから僕らの人種じやない。」

「口説いちゃえよ」

「そんな事できぬよ。」

馨は「一ラを一口飲んで、テーブルの上に置いた。

「僕の事は、弟みたいに思つていいだけだよ。」

「そうかな？」

「うん。それはありがたいけれど、普通に生活している人を、これ以上、こっちの世界に巻き込んじゃいけないのかもしないな…。」「人生いろいろ、ハプニングがあつてもいいじゃん」

「そんなに軽く言える事じゃない。自分がしてきた苦労を考えたらね。」

「だから諦めるのか?」

馨はうなだれて、ただじっとテーブルを見つめていた。

美樹はコンパクト見るふりをしながら、馨の様子を窺っていた。

「さつ、行くぞ!」

「何処へ??」

コンパクトをたたんで、美樹は立ち上がった。

「いいから来いって!」

座っている馨の腕を持ち上げ、無理矢理立ち上がらせると、美樹は馨の腕を自分の腕に組ん

で、マクドナルドの階段を下りる。

「まだ、ハンバーガー食べてないよ」

「つぬさい奴だな」

「馨、だつて口クに食べてないくせに」

「あんな場所じゃ、お前が声を潜めるから、何を言つてゐのかちつ

とも聞き取れん」

「アイタタ、痛いよ」

「いいからヨタヨタしないでちやんと降りろ」

ジャケットの袖を引っ張られて、馨はよろよろと階段を下りきった。

ありがとう」やこました、と店員の爽やかな声が後ろから聞こえると、眩しい街並みに一人は出た。

「どこに行くのさ??」

「いいからついてこい。方向音痴。」

田曜日だけあって、ビジネスマンはほとんどいない。大きな交差店を、数え切れない程の人並みが、がやがやと楽しそうに歩いている。

「ほれ。入れ。」

と美樹が立ち止まつたウィンドウを見上げると「松屋」だった。

「牛丼屋??？」

美樹は返事もせずに先に入り、慌てて馨が追いかけると、右手の切符の自動販売機にお金を入れている。

そしてそのまま、カレーのテイクアウトのボタンを押した。

「お前も買えよ。」

「へ？」

「味噌汁もついてくるだ。」

「…。」

馨も財布から500円玉を取り出し、真似して切符のボタンを押してみた。

「やつぱり買いやがったな。」

美樹は、考えすぎると過食に走る馨の弱い所を見逃さなかつた。

馨は切符をとりだして、頭上に掲げてみた。

「なんだか、立ち食いそばの切符みたいだ」「アホな事言つてないで行くぞ」

美樹はつかつかと通路を歩き、右奥のカウンターに切符を出した。そして、ビニールの袋を受け取る。

美樹がくるつと避けたので、馨も真似して切符を出してみる。袋を受け取つて、

「カレーのテイクアウトつけてやるんだね」と丸い皿を更に丸くする。

美樹は二口ともせず、

「行くぞ」とたつたか今来た通路を歩き出した。

「ど」「行くんだよ」

馨は慌てて追いかけて店を出た。

「ここんな街中でテイクアウトのカレーを食べるのか？」

「はっはっは」

美樹は高笑いして歩いていく。

ちょっと静かな通りに入る。

道一本隔てたら、あんなに賑やかな通りになぜだらうへ。

と、向こうから、どうみても「不倫」であろう、眼鏡をかけた中年男と若い女が、べったり腕を組んで歩いてきた。

すれ違った二人を振り返って、また前を向くと、美樹が建物の前に立ち止まっていたので、轡はぶつかりそうになつた。

ん？と思つてみると、つかつかと中に入つていく。

「ここ、ラブホテルじゃないのー？」

「つたりめーだろ。見りやわかるだろ？が。」

部屋は…とぶつぶつ呟きながら、パネルを眺めている。

「なんでもウハホなのや?」

三歩下がって、おしゃるおしゃる美樹に尋ねるが、返答はない。

プチッとボタンを押して、キーを取ると、美樹はエレベーターへ歩いていった。

美樹はエレベーターに乗り込み、「3」のボタンを押すと、ふう、と壁にもたれ、「こんな所じやなこと、小心者のお前はちやんと喋らないからな。」といやっとした。

「悪かつたな、小心者で。」

「フリータイムだ。こつとくナビ、ワリカンだからな。」

「今、僕負ひなのに」

袋の中で斜めになってしまったカレーを齧は流して直すと、ぶつくさ文句を言つた。

「降りるや」

と美樹はためらこもなく、308号室へと進んでいく。

赤いカーペットが、なんだか、いかにもラブホテルといつ、艶めかしさ演出しているようだ。

「私のセンスだから、気にいらなくても我慢しinよ」とキーを入れると、豪華すぎる大理石の玄関から曰くお城の中のような部屋が広がっていた。

「なかなか可愛い部屋だろ？」

「うる…。」

美樹のセンスに少し感動すると、馨は円形のベットに座った。

「なんだか、ベルサイユ画殿みたいじゃない？」

「ベルサイユはこんなにチンケじゃないだろ」

「でも、可愛い部屋だなあ。」

「お前が選ぶ部屋よりもセンスがいいだろ」

「悪かったな。センス悪くて」馨はぱつと膨れた。

瞬間、身体がガグラッと動き、「わっーー」と馨が悲鳴を上げた。

「このベットは回転するんだぞ」

「動かす前に言つてくれよ」

美樹はぐるぐるとカレーの袋を持ったまま、ぐるぐるゅうじくと回転していく馨を見て、得意げに笑つた。

「お前が前、「僕は回転するベットの部屋に当たつた事がない」と嘆いていたから連れてきてやつたんだ。」

「わかつたから、止めてくれ」

ふふん、と美樹はスイッチを切る。

カレーの袋をテーブルに置いて、馨は心臓の辺りを押さえる。

「あー驚いた。」

「どうだ?」

「めちゃ驚いたけれど、これ面白くなーー!」

馨の死んでいた日に輝きが戻ったのを確認すると、よかつた、と内心美樹はほつとした。

「すいになあ。」

子供のように馨はぽんぽんとベットの上でお尻を浮かしている。

「もう一回いくわ。それい……。」

「わわはははは」

馨は笑いが止まらなくなっている。つられて美樹も回のベットに乗つて、ケラケラと笑っていた。

「うわーおーー。」

「ヒューヒュー……。」

奇声を発しながら、一人は3歳児のようにはしゃぎまくっていた。

普段はあまり笑わない美樹が、声をあげて笑っている。

馨も壊れたおもちゃのように、笑いがとまらない。

顔を見合させて、ふたりは笑い転げていた。

ぐるぐると回る。

部屋も回るよ。

世界も回る。

意味もなく、そんなことをキャーキャー叫びながら、一人は笑い続けた。

メルヘンのような部屋の装飾品達もぐるぐる回る。

散々笑い転げて、一人はベットに寝転がつた。

「メリーポーランドみたい。」

「きれいだなあ。」

幸せな表情を顔に浮かべながら、一人は天井を見上げていた。

はしゃぎ疲れ、ふたりは荒い息が収まるのを待つた。

「おまえ、トトロさんを本当に諦めるのか？」

「なんだよ、いきなり…。」

「諦めたくないんだろ」

「そりゃそうだけど。」

まず大前提にさ、と馨の声が大きくなる。

「k·i·m·eさんは僕の事を、恋愛対象として好きなわけじゃないか  
？」

「もしも、いつか好きになつてくれたらどうするんだ？」

万が一、やうなつたとしてもね…と天井を見ながら齧が呟いた。

「守りたいんだ」

「お前のちつぽけなプライドをか？」

「ひつん。k·i·m·eさんの人生を」

馬鹿かよーと美樹は起き上がった。

「なんでお前が諦めるのが、k·i·m·eさんの人生を守る」とになる  
のさ」

ふん、と美樹はまた、ベットに転がった。

「僕が手を出さなきや、彼女の人生、平和なままなんだよ」

一人は黙つたまま、くるくる回る天井を見つめていた。

「普通にお話するだけでもか？」

「ああ、こんな変な人生に顔を突つ込ませないで済む」

「ほんとに、余計な心配ばかりするやつだな。」

「ううかな。当然じゃない？」

美樹は呆れたように腕を組んで天井を睨んでいる。

「ノンケは誰も僕の人生に巻き込まない。何も知らないまま、こんなに悩む事なんてないままに、無事に人生を過ごしてほしい。」

大きく、死んだような目を開けながら、馨はゾッとするような口調で呟いた。

「それが僕の哲学さ。」

美樹は腑抜けの今にも死にそうな馨に驚いた。

「お前のその”哲学”つて奴が私は気に食わないな。」

馨は黙つたまま、仰向けになつている。

「冒険心のない、つまらん奴だよ、おまえは。」

「そういうのもしれないね」

「あつさり認めるなつて。私の友達のタチは、もつと堂々としてるぞ」

「人の迷惑を考えない、そういう性格だつたら楽だろうな。」

「格好ばっかりつけやがつて！マイナス思考つて言つんだよ、そういうのは。」

「そいつはそいつ、僕には僕の考えがあるんだ」

美樹はふん、と鼻で笑つた。

「僕は産まれつきのタチだ。もう習性になつてゐるんだから仕方ないじゃん」

「人の事ばっかり考へてるフリして、自分の人生から逃げてる習性な」

馨は枕を取つて顔に押し付け、聞きたくないとでも言つよつた仕草をした。

今は馨をすぐには責めてはいけない。

しばらく静かな沈黙があった。

「バカおる」

「なに?」

「普通に返事するなよ」

この人は例え幼稚園児が「バカおる」と呼ぼうが、怒りもしない人なんだ。だから私はコイツが好きなんだ。

「それが一晩中泣いて考えたチンケな答えるのか?」

「僕はタチだもん。泣くほどセンチじゃないよ」

「今は抜け殻みたいに落ち着いてるフリしてるけれど。」

美樹はフーと溜息をついた。

「昨日は一晩中、眠れずに泣いてたんだろ?」

「泣いてないって。泣いたら、腫れやすい僕の皿は腫れてるはずだろ？」

「見ぬふみ、とこづけひに人差し指で臉を指差す。

「馨……」

「うそ……」

「朝、氷で皿を冷やしてたんだね。」

「なんでそんなこと……」

「お前のママが言つてる

「ママー。」

驚いて起き上がって、かおるは辺りを見回した。

「お母さん……？」

「言つてやつてくれって。お母さんは大丈夫だと。女はみんな、お前が思つ程、そんなに弱くできてないってさ。」

「……」

「お前が心配しそうなんだよ」

美樹は皿を開じたまま、じつと向かを聞いていた。ひづった。

「ママさんからメッシヤージ

「…

「もつと頭をやわらかくしなさいだつてや。」

馨の瞼につつすりと涙が浮かんできた。

「ママ…。」

ママはこつも優しかった。

いつも特製のオレンジジュースとサイダーを割った飲み物を作ってくれたつけ。

僕のリクエストの卵チャーハンも…。

こんな子を育てさせてごめん!

そして、本当の事が言えなくてごめんね。

美樹は馨の横顔を見た。涙が幾筋も、頬を伝っていく。

「馨

「うん…」馨は涙を拭つた。言葉を出せても、言葉にならない。

「人の気持ちの中で動搖しないで、だつて」

「僕がそんな風にみえるのか…」

「みえるよ」

美樹は目を開けてすーっと大きく息を吸い込んだ。

「少しだけ自分の意思で動き始めて『じらんよ』

美樹は馨の横顔を見つめていた。

「僕にできるかな」

馨の、漆黒の美しい瞳が真剣な色を帯びて、美樹の方に向けられる。

「できるかどうか、失敗してもいいから動き始めたらいい。」

馨はじつと考えこんでいる。

「おまえは、今まで、”人生”そのものを生きてなかつたんだよ。だから、動き始めたその時、初めて馨の誕生日になるのさ」

馨には、最初はわからなかつたが、その言葉の意味を、次第に理解しあじめた。

美樹は馨の瞳を見つめた。

馨の瞳は美しいが、いつもどこか悲しげだ。

それが、なぜかうすら消え始めているような気がした。

「やれるかな？」

「やれよ」

美樹がもどかしそうに囁く。

「今の天国のママさんなら、喜ぶんだぞ」

馨は両腕に頭を乗せて、天井を見上げた。

「わづか…。喜んでくれるんだ…。」

美樹はベットに両手をついて、マイショと勢いをつけて起き上がつた。

「アーア、ヤメたヤメたあ」

「ん?」

「どうしたの?」こう様に馨の黒い瞳が美樹の瞳をじっと見つめた。

「そり、腹減つたら?」美樹はウインクした。

「うん」

「2カ月後」

馨はパソコンの前でうたた寝をしていた。

ふと顔を寝返り打つて、パソコンの端に当たってしまった。

「あいててて」

目を擦つて起き上がる。

もう朝の4時だ。

外からは朝日が昇る気配がする。

目を擦つた右手の力が抜け、キーボードにすべり落ちてしまった。

「何やつてるんだろ?、僕は…」

慌てて起きると、すべり落ちた手の平がエントリーに当たっていたのか、誰かが入室している事に気がついた。

TAAKO ハーイ

馨は眠い目をまたこすりて入力した。

馨 じんばんは。あ、もうおはようかな。

TAAKO こんな時間までずっと起きていたの？

馨 いつの間にか寝ちゃってたよ。今起きたといふ。

TAAKO -ki miさん待つてます・つてトピックにあるけれど。

TAAKO このお部屋、毎日作つてたの？

馨 まあ…そうです。。

TAAKO お邪魔だつたかしら？

馨 いいよ。もう、待ち人はここには来ないつてわかってるんだ。

馨 それに、もう朝だもの。

TAAKO いい朝ね。

馨 うん。だんだんキレイな空になつてきてる。

TAAKO 馨は彼女、いる？

馨 いないよ（笑）。

TAAKO あら、サミシイわね。

馨 確かに寂しいよ。

馨 でも、寂しい、寂しいって言つてるだけじゃ、何も解決しないから。

TAAKO 大人の意見ね。

馨 強がってるだけかも。

TAAKO 待ち人はお友達？

馨 ううん。ママであり、恋人であり、家族。

TAAKO 本当に変わった子ね。メールでもしてみたらどう？

馨 メールアドレスすら、知らないんだ。

馨 聞いておけばよかつたよ。鈍くさいな、僕。

TAAKO 本当にね。

馨  
?

TAAKO ちゃんといい子にしてたのかしら?

馨  
? :

TAAKOさんが退出しました。ヒ、ディスプレイに表示された。

馨は何度も何度もエンターキーを叩き続けた。

やがて、誰かがチャットルームに入室してきた。

馨 本当にkimiなの???

kimi めひさしふりね。

馨 ウソ…。

待っていたはずなのに、馨の目が丸くなる。

kimi あの、ネットナンパ師が、一体ずーっと何をしているのかしらね。

kimi 一ヶ月間もナンパひとつもせず、お部屋にいるなんて。

馨 kimi -----.

嬉しさは、段々と涙にかわる。

馨 会いたかったよ…。

馨はティスプレイの前で、顔をゆがめた。

kimi 私も会いたかった！

馨の頬が、すこしずつ震えてゆき、やがて、涙でぐちゃぐちゃになつてゆく。

馨 僕は…、僕は、ずっとkimiに会いたくて…。

馨 はひくひく、しゃくつあげて、キーボードが打てない。

馨 会いたくてたまらなかつたんだよ。

kimi うん…。

kimi わかつてゐる。

馨 本当は大好きなんだよーーー。

kimi 私を？

馨 うん。

kimi ママとして?

馨 ママとしても、女人としても、です。

ディスプレイの前でkimiも田尻に浮かんだものを拭っていた。

kimi 私もその言葉を待っていたのかもしれないわ。

馨 kimi?

kimi あ、仕切り直しよー。

ディスプレイの前で、kimiはかけた眼鏡を持ち上げた。レンズの奥の目が優しく笑っている。

kimi 馨、両手を広げて?

馨 いっ?

馨はディスプレイの前で両手を横に広げてみた。

kimi そ、う。

kimi 広げたままで。

馨はどういう事なのか、すこしう迷惑した。

kimi 今、あなたの両手には羽根がついたの。

kimi だから、もう自分を閉じ込めないで、どこにでも飛べるのよ。

kimi そして、

kimi 私も飛び立てる羽根をつけて、両手を広げるわね

kimi だから馨、私の手の中に飛び込んできなさい。

馨は両手を広げたまま、肩も腕も、ガクガクと震わせて泣き続けていた。

もう終わつたんだ。自分を閉じ込めて、飛べなくなつていた日々は。

そして、腕の中には、愛する、本当に愛する人が、本当に僕の中にいる。

この大都会に朝の空がいっぱいに広がっていく。

人も街も歩き始める。

そして、沢山の人々の、それぞれの生をコンクリートの大地が受け止めていく。

痛みも、喜びも、すべて、飲み込みながらー。

-END-

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2564d/>

kimi ( サグラダファミリア版 )

2010年10月12日07時14分発行